

純ちゃんのコーナー

(ロータリー3分間情報)

Part XII



伊丹ロータリークラブ

深川 純一

目 次

1. 「新年度に際して一言」	2
2. 「ロータリーを考える」 その1	3
3. 「ロータリーを考える」 その2	4
4. 「ロータリーを考える」 その3	5
5. 「ロータリーを考える」 その4	6
6. 「ロータリーを考える」 その5	7
7. 「ロータリーを考える」 その6	8
8. 「R Iのテーマ」 その1	9
9. 「R Iのテーマ」 その2	10
10. 「R Iのテーマ」 その3	11
11. 「R Iのテーマ」 その4	12
12. 「R Iのテーマ」 その5	13
13. 「R Iのテーマ」 その6	14
14. 「私の公式訪問卓話より抜粋」 その1	15
15. 「私の公式訪問卓話より抜粋」 その2	16
16. 「リーダーシップ」 その1	17
17. 「リーダーシップ」 その2	18
18. 「リーダーシップ」 その3	19
19. 「リーダーシップ」 その4	20
20. 「リーダーシップ」 その5	21
21. 「地区大会」 その1	22
22. 「地区大会」 その2	23
23. 「地区大会」 その3	24
24. 「ロータリーの伝統」 その1	25
25. 「ロータリーの伝統」 その2	26
26. 「ロータリーの伝統」 その3	27
27. 「ロータリーの伝統」 その4	28
28. 「ロータリーの伝統」 その5	29
29. 「平和と命」 第35回RYLA総括	30

序にかえて

竹中秀夫会員の発想によって始まったこの3分間情報「純ちゃんのコーナー」も早くも12年の歳月を閲しました。

ところで、今、御承知のとおり大変な不況であります。安倍首相は、何とか景気をよくしようと頑張っていますが、これは簡単ではありません。しかも、これは日本だけではなく、アメリカを始め先進国全体の経済が行き詰まっています。ご承知のとおり、リーマン・ショック以後、世界の経済は構造的な低成長に入っています。

18世紀末の産業革命以来、人類に未曾有の経済発展をもたらした資本主義は、今や、「ユーロ危機」や「原発事故」を始め沢山の困難な問題を発生させています。日本のみならず、多くの国で国民の所得格差を拡大して貧困層や失業者を大量に生み出したため、最近は、「1%の富裕層のためではなく99%のための民主主義を」ということが叫ばれ、2011年10月には世界82カ国で格差是正と失業反対のデモが起こったことは記憶に新しいところであります。また、止めどなく地球環境の破壊も進んでいます。

そして、更に大きな問題は、日本を含む先進国の資本主義経済自体が構造的な不況と思われる長期の不況に陥っていることであります。

何故、このような状況になったのか。その最大の原因は、近年、産業資本主義から金融資本主義へ移行したアメリカの経済政策に則って、長期的な信頼関係に基づく取引乃至経済体制から短期市場での取引を主体にした経済体制へと転換したことにあります。このことによってロータリーの職業奉仕の原理に反する事態が起りつつあると考えられるのであります。

しかし、これらの問題は、^{まさ}将に現象の問題に過ぎません。したがって、現象の問題に一喜一憂することは愚かなことであります。私達ロータリアンは、常に現象に惑わされず、物事の本質を見抜く力を失ってはならないと思うのであります。ロータリーは、本来如何にあるべきか、というロータリーの本質にあるものをしっかり見抜いて行動しなければなりません。そのことによって、初めてロータリーの未来の展望を切り開くことが出来ると思うのであります。

最後に、この一年間、私の話を根気よく辛抱して聴いて下さったクラブの皆さん方の友情と寛容に心から感謝を申し上げますと共に、このパンフレット発刊に御尽力を賜りました竹中秀夫会員、西岡伸明会員はじめクラブ事務局の皆様方に心からなる感謝を捧げてペンを擱きます。有り難うございました。

深川 純 一

1. 「新年度に際して一言」

新年度に際して、驚くべきことを御報告申し上げます。今回は、20世紀初頭のあの輝かしいロータリーを復元することは将に永遠の課題だと申しましたが、実は、そのことを裏付けるような話を紹介しておきます。

この7月1日に東京でガバナー、パストガバナー、ガバナーエレクトの会合がありました。その時、私が敬愛する福岡西クラブの廣畑富雄パストガバナー（職業分類・公衆衛生学教育）から、先般のバンコックの国際大会に参加された時の感想をお聞きしました。先ず、廣畑先生は次のように言っておられます。

「ジョン・ヒューコ（John Hewko）新事務総長の閉会式の日々の講演には驚きました。ロータリーを殆ど知らない方で、求人広告を見て応募した由。スピーチの最後にお父さんに感謝する、お父さんがR Iがこういう求人広告をしていると教えてくれたので応募出来たとのこと。不思議な話でした。R Iの歴史で初めてでしょう。」彼は「弁護士さんで、アフリカの援助に経験があると聞きましたが、ロータリーを知らなくとも、発展途上国の援助に経験があれば、そういう人をR Iは事務総長として求めているのでしょうか」と廣畑先生は言っておられます。

なお、廣畑先生は、追記として「R Iのホームページの紹介文を読むと、John Hewko, Secretary General/CEO of Rotary International and the Rotary Foundationとなっています。ロータリーのように、クラブを主体とする団体に、CEO: Chief Executive Officer、大会社に存在するC E

O（例えば、日産のゴーン氏）はおかしいのでは？無論、R Iの歴史で初めてのことです」と言っておられます。

全くお説の通りでありまして、ロータリーのようなクラブの連合体にすぎない非営利団体についてCEO等と謂うのは、将に営利団体の縦型思考でありまして、ロータリーの本質を弁えないこと甚だしいものと謂わなければなりません。

また、本会議での各演説について「演説を聞いていると、ユニセフかWHOの会議に来ているのか、錯覚が起こりそうでした。

ある日の本会議（午前中）での演説、1. 世界貧困対策プロジェクト、2. ユニセフ親善大使、3. 国際連合基金、4. グラミン銀行（少額融資）であり、これも不思議なことでした」と。

そして最後に、廣畑先生は「世界のロータリーと日本のロータリーとの乖離が一層進み、つまり、R Iはどんどん変わる、日本のロータリーは、ロータリー100年の伝統を守ろうとする、その乖離が進んできました。したがって、日本のロータリーは、独自性、主体性をもつ存在であることが大切だと考えます」と結んで居られます。真に嘆かわしいロータリーの現況であります。

ポール・ハリスが開発したロータリーの思想、そして、チェスレー・ペリーが開発したロータリーの組織、この類い稀なる素晴らしいロータリーは、現在、殆ど失われてしまいました。これを20世紀初頭のあの輝かしいロータリーに復元することは、将に永遠の課題と謂うほかはないと思います。

2. 「ロータリーを考える」 その1

前回は、福岡西クラブの廣畑富雄パストガバナー（九州大学名誉教授）が先般のバンコック国際大会に参加された時の感想を紹介致しました。その最も重要な点だけを要約しますと、廣畑先生は、ジョン・ヒューコ John Hewko 新事務総長の閉会式の日々の講演をはじめ本会議での発言者達の演説について触れられ、世界のロータリーと日本のロータリーの間の乖離が一層進んでいるということを描き出されていました。

そこで、今回から暫くは、ロータリーが何故そのような状況になったのか、その原因は一体何か、そして、如何にすれば、これを20世紀初頭のあの輝かしいロータリーに復元することが出来るのか、ということについてロータリーを考えてみたいと思うのであります。

まず、ジョン・ヒューコ John Hewko 新事務総長の問題であります。彼はR Iの求人広告を見て事務総長に応募したということであり、ロータリーというものを殆ど知らないようであります。本来、事務総長は、全世界のロータリークラブの連合組織体であるR Iの組織の大黒柱でありますから、ロータリーの思想、組織、実践に精通していなければなりません。にも拘わらず、R Iは、未だロータリーを理解していない人を求人広告によって事務総長に選任したというのであります。啞然とせざるを得ません。

曾て、R Iの初代事務総長は、偉大なる組織管理者チェスレー・ペリー Chesley R.Perry でありました。彼は、1910年全米ロータリークラブ連合会初代幹事に就任し、1912年以降、この幹事が事務総長と呼ばれているのであります。したがっ

て、彼は、就任以来32年間に亘って事務総長の要職にありました。

実は、初期ロータリーがやがて全世界に広がるに従って、これを合理的に管理する原則を開発しなければならなくなりましたが、この組織管理の責任を一身に集めて遂行したのがChesley R.Perry でありました。ロータリーは、ポール・ハリス一人で運動体を形成することは出来なかったのであります。Chesley R.Perry によって初めて運動体を形成することが出来たのであります。ポール・ハリスは、彼を評して「私はロータリーのデザイナーに過ぎないが、彼はロータリーのビルダーである」と言っています。

事務総長は、R Iという巨大な組織の管理運営をするため職務に専念しなければなりません。そこで、その生活を保障するためロータリアン群の中で実質的にはただ一人の有給役員なのであります。任期は5年であり、再任を妨げないのであります。

Chesley R.Perry 以後の事務総長としては、ラムジョイが約10年間、ジョージ・ミーンズが約20年間その職務を努めました。

それほど事務総長という役職は重要なのであります。にも拘わらず、R Iは、それを求人広告によって選任するとは一体何を考えているのか全く理解に苦しむところがあります。

3. 「ロータリーを考える」 その2

前回は、世界のロータリーと日本のロータリーとの乖離が一層進んでいるということについて、何故そのような状況になったのか、その原因は一体何か、ということを含一度考えてみたいと申しました。そのためには先ず、初期ロータリー以来のロータリー発展の軌跡を簡単に振り返ってみなければなりません。

そこで先ず、1905年から1927年までの初期ロータリーの原理・原則の開発の流れを振り返ってみますと、1905年2月23日、ポール・ハリスは「一業一会員制の原則」を採択し、次いで、3月23日、シカゴクラブの創立総会において「規則的例会出席の原則」を採択しました。これらは何れも親睦のための基本原則でありました。

ところが1906年春、ドナルド・カーターの忠告によって、親睦だけのロータリーに世のため人のための考え方が入ってきました。これがロータリーにおける奉仕という考え方の萌芽でありました。そして、1907年、アーサー・シェルドンによってロータリーにおける奉仕概念が開発され、奉仕のためのクラブであれば全米の地域社会に作るべきであるという考え方によって、1908年以降ロータリーの拡大が始まり、遂に1910年、それらのクラブの連合体としての全米ロータリークラブ連合会(現在のRI)が設立されたのであります。

そしてそれ以後は、この連合会(RI)の国際大会決議によって、1915年にロータリー道徳律の採択、1922年にRIの定款細則及び標準クラブ定款の採択、

そして1923年に奉仕の実践に関する決議第23-34号を採択するに到り、そして、1927年、RI理事会によって四大奉仕の概念を開発し、原理探求のロータリーから実践のロータリーへと入って行ったのであります。

このように致しまして、第2次世界大戦の終わる1945年までは、原理に裏打ちされた素晴らしい奉仕の実践が行われて来たのであります。

ところが、戦後、アメリカは、ドルの支配によって未曾有の繁栄をもたらしましたが、やがて物質的な豊かさに溺れて次第に倫理が衰退し、今では初期ロータリーの素晴らしい原理体系が殆ど崩れ去ってしまったと謂えるのであります。

日本のロータリーも、1960年頃までは戦前のロータリアンによって、ロータリーの素晴らしい伝統が残っていましたが、やがて、その人達の逝去につれてアメリカの轍を踏むようになって行ったのであります。

その原因の一つに倫理の衰退がありますが、しかし、何故倫理が衰退したのかということをお考えすると、その最大の原因は、ロータリーの組織が巨大になりすぎたこと、詰まり、過度の会員増強にその原因があると思うのであります。

元来、会員増強は、国際ロータリーの崇高な使命であります。にも拘わらず、ここ数十年來、全世界的に会員は減少を続けています。それは一体何故か。

国際ロータリーが会員増強の理念を無視しているからであります。

4. 「ロータリーを考える」 その3

前回は、元来、会員増強は国際ロータリーの崇高な使命であるにも拘わらず、ここ数十年来、全世界的に会員が減少し続けている。それは一体何故かというところ、国際ロータリーが会員増強の理念を無視しているからであると申しました。

では、会員増強の理念とは一体何か。

元来、ロータリークラブは、1905年の創立当初は親睦だけの仲良しクラブでありました。ところが、翌1906年春、Donald Carter が会員相互の親睦しか考えないクラブは一種のエゴイズムであるから、世のため人のための奉仕のことも考えるクラブでなければ永続性がない、と忠告したことによって、世のため人のための奉仕を目的とするクラブに変わりました。そして、世のため人のためのクラブであれば、それはシカゴだけに在るべき筋合いのものではなく全米の地域社会に在って然るべきものであるということになって、ここにロータリーの拡大が始まったのであります。これが会員増強の原点なのであります。

したがって、会員増強ということとは、ただ単に会員を増やすということではなくて、全米の地域社会に世のため人のためのロータリー精神を蔓延させる拠点としてのクラブ、所謂ヘッド・クォーターとしてのロータリークラブを作る、これがロータリーの拡大であり、このようにして会員を増強することなのであります。

そこで、ロータリー精神を地域社会に蔓延させるためには、当然のことながら、ロータリー精神を身につけた人を入会させなければなりません。そのためにロータリークラブは、会員の入会については厳格な手続

をとって来たのであります。

昔は、職業分類委員会、会員選考委員会を始め14段階の審査を経て入会を許可したのでありますが、その後、規制緩和によってそれが6段階になりました。

何故このような厳格な審査をしたかと謂いますと、もし、一人でもロータリー精神を身につけない人、即ちロータリアンとして相応しくない人が入会しますと、クラブにとって一番大切な親睦、将来に金銭などを以てしては購えないほど大切なクラブ親睦が崩れてしまうからであります。

そこで、このような厳格な手続によってロータリー精神を身につけた良質な会員だけが入会することにより、初めてクラブの親睦が保たれていたのであります。

ところが、今、会員入会に際してこのような厳格な手続をとっているクラブがどれほど在るでしょうか。会員の良質性を慎重に審査しないで入会させますと、当然のことながら、会員の質が落ちると同時にクラブの質が低下し、惹いては国際ロータリーの質が低下するのであります。このようにしてロータリー精神が地域社会に、そして惹いては世界社会に行き渡らないことになるのであります。

したがって、会員増強の要諦は、先ず、良質な会員を増強することであり、そして、増強と謂うのは、「増」即ち会員の量を増やすことだけでなく、「強」即ち会員の質も良質化することなのであります。

5. 「ロータリーを考える」 その4

前回は、会員増強の要諦は、先ず、良質な会員を増強すること、そして、増強というのは「増」即ち、会員の量を増やすことだけではなく、「強」即ち、会員の質も良質化することであると申しました。会員の質を良質化することは会員増強の絶対条件なのであります。

何故、会員の質を良質化することが大事なのか。ロータリーは、本質的に質の世界であります。質を無視して現象的に会員の量だけを増やそうとするのは、物事の本質を見ないで現象に惑わされた考え方であり、したがって、必然的に質は落ちます。

会員の質が落ちるとロータリーの魅力は失われます。

先日の石丸ガバナー公式訪問の卓話では、6000人入会したのに8000人退会したと言っておられました。会員の数だけ増やそうとするとこのような現象が起きます。

また、曾て、国際ロータリーは、女性会員制度を新たに作れば、当然、入会した女性の数だけ会員が増えるだろうと考えて、1986年、女性会員制度を創設しました。

その結果どうなったか。女性会員の入会者数よりも男性会員の退会者数が増えたという皮肉な現象が起きたことは既に御高承のところであり、これは質のことを考えずに量だけを増やそうとしたからであります。

1999～2000年度の国際ロータリー会長カルロ・ラビッツァさんは、ロータリーが衰退したために会員が減少していると警告しました。

何故、会員が減少するのか。 経済的な不

況が原因なのか。否、アメリカは好況であるにも拘らず会員が減少している。

では、会員減少の根本の原因は一体何か。 ラビッツァさんは、ロータリーに魅力がなくなったからだと断言しています。

では、何故、ロータリーに魅力がなくなったのか。 ラビッツァさんは、それはロータリアンがロータリーの基本的なルールを守らなくなったからだと結論付けています。

したがって、ロータリーの魅力を作るには、先ずもってロータリアンがロータリーの基本的なルールを守らなければならないのであります。ロータリーに魅力がなければ会員は増えません。魅力というのは質の問題であります。

では、ラビッツァ会長のいう基本的なルールとは一体何か。 それは、ロータリーの中核にある原則、即ち、ロータリーの原理の魅力の根源である一業一会員制の原則と規則的例会出席の原則なのであります。

ところが、2001年度の規定審議会においてこの一業一会員制が廃止され、一業多会員制に移行しました(01-148)。その結果、どういうことになるのかと言いますと、クラブの中に同業者が沢山入って来ます。その結果、何億円にも換えがたい、金銭では買いきれないほど大切なクラブ親睦が失われてしまうのであります。これではロータリーの魅力など生まれるべくもないのであります。魅力がなくなれば、会員が減少するのは至極当然のことであります。

6. 「ロータリーを考える」 その5

前回は、ロータリーの魅力の根源である一業一会員制の原則が2001年度の規定審議会において廃止された結果、クラブの中に同業者が入ることによってクラブ親睦が失われ、ロータリーの魅力がなくなって会員が減少するということを申しました。

ただ、ロータリーの魅力がなくなる原因は、クラブに同業者が入会することだけでなく、他にも色々の原因があります。

元来、クラブというものは、一業一会員制の原則によって、色々な職種の会員が居て、初めて魅力あるものとなるのであります。したがって、ロータリーを魅力あるものにするためには、一業一会員制の基本前提である職業分類の原則を守らなければなりません。ところが、現在、この基本的なルールが大変乱れています。これではロータリーの魅力など失われるのが当然であります。

我が国における職業分類適用の現状を見ても、例えば、酒造業の業界では、或る酒造会社の社長であると同時に、信用金庫の理事長でもある人が居るときに、信用金庫の職業分類で入会します。或る酒造業の社長は、山林業で入会します。他の酒造業の社長は、貸ビル業で入会します。このような操作をすれば、一つのクラブに、酒造業者が数人入会することができることになります。

これは、一つには、資本主義が爛熟して多目的企業が増えたことも一つの原因ではありますが、同業者を排除するという一業一会員制の観点からは、このような会員選考は職業分類制度の正しい運用とはいえないと思うのであります。

また、例えば、クラブ定款第8条第2節の「5名またはそれ以上の正会員がいる職

業分類からは正会員を選出してはならない」ことになっていますが、この場合、或る医者はどうしてももう一人入会させたい時に、悪知恵を働かせて、その医者が猫を飼っていることを理由に「愛玩動物飼育」という職業分類を作って、その医師を入会させたとすれば、これも職業分類制度の正しい運用とはいえないのであります。

この辺のことは昔から指摘されていたところでありまして、1923-24年度のRI会長であったガイ・ガンディカーが、初期ロータリーのバイブルと謂われた『ロータリー通解』という本の中で、「バラの木を一本庭に植えたことをもって、農園芸という職業分類を作ってはならない」ということを説いています。したがって、昔からこの様な悪知恵を働かせる人はいた訳であります。

しかも、現在のロータリーでも職業分類制度の正しい運用が行われていないようでは、ラビツァ元会長がロータリーの魅力がなくなって、会員が減少すると言って嘆くのも無理はないと思うのであります。したがって、職業分類表を整備して、それを厳格に適用していくことがロータリーの魅力を守り、その魅力を育ててロータリーを発展させることになると思うのであります。

何はともあれ、昨今のロータリアンがルールを守らないことは、誠に目に余るものがあります。したがって、ロータリーの魅力もなくなり、会員が減少するのであります。

7. 「ロータリーを考える」 その6

前回は、昨今のロータリアンがルールを守らないことは誠に目に余るものがあり、このことがロータリーの魅力の喪失、会員減少の原因だと申しました。

そこで、ルールを守らないことについて若干意見を補足しておきます。例えば、例会の途中退席の問題があります。私達は、従来、例会には例会時間の100%在席するのが当然であるという教育を受けて来ました。例会に出席しながら途中で退席するなどということは、クラブに対して大変失礼なことであると共に、同席しているロータリアンや卓話者に対しても大変失礼なことであり、したがって、私は、例会の途中で退席しなければならないことが予め判っている場合には初めから出席致しません。

ところが、国際ロータリーが成立した1922年に例会出席の60%と謂うルールが制定されましたが、近年、例会時間の60%に在席すれば、途中退席する権利があるとまで主張する人が出てきました。しかし、これは、退席する権利があるのではなく、例会時間の60%在席すれば、不慮の事故、例えば奥様が交通事故で入院したなど突発的な事故が発生したときに限って、途中で帰ってもクラブに対して失礼にならないと謂うだけのことでありまして、権利があるなどと謂うべき筋合いのことではありません。権利が有るとか無いとか謂うことは法の世界のことでありまして、ロータリーは法の世界ではなく倫理の世界でありますから、全ての行動は倫理的でなければならないのであります。

その後、近年、この60%ルールは50%に変更されましたが、そのことが

50%在籍すれば退席する権利があるという意味ではないことは当然のことです。しかも、60%ルールが適用されていた頃にも、12時30分に例会が始まって1時6分まで在席するのであればまだしも、1時に卓話が始まる直前に堂々と退席する会員が沢山いました。これでは、50%しか在席していないのでありますから、当時としては明らかにルール違反でありました。それにも拘わらず、そのことを恥ずかしいとも思わない。クラブもまた、そのようなロータリアンにメイクアップカードを出していたのであります。クラブもロータリアンも挙げてルールを守る心が麻痺してしまったと謂わざるを得ません。ロータリアンとしての誇りは一体何処へ行ったのかと思うのであります。しかも、大都会のクラブでは、このような例が寧ろ当然のことのようになっていたのであり、卓話の時間の始まる直前にビジター達が5、60人一斉に退場する光景は真に異常なものでありました。あとには、そのクラブの会員が2、30人しか残っていないという有様であり、これでは、ロータリーの魅力など生まれる筈もなく、会員が減少するのは寧ろ当然であります。

元来、クラブの例会は、最初の30分は食事をして親睦を楽しむ時間、あとの30分は卓話を聴いて奉仕に耳を傾ける時間、という構成をとっているものであり、これに例会には100%在籍する一つの意味でもあるのであります。

8. 「R Iのテーマ」 その1

R Iのテーマが唱えられたのは比較的近年になってからのことでありまして、元来は、R I会長の個人的な所信の表明であり、ターゲットと呼ばれていたものがあります。ターゲットがロータリーの世界に最初に現れたのは、1953～4年度にウルグアイから出たR I会長ホアキンS・シビルス氏が「クラブが増えれば友人が増える。友人が増えれば奉仕の機会が増える」と言ったのが始まりであります。したがって、これは会長の全く個人的な考えを吐いたようなものでありまして、それ以上に何らの意味をもつものではありませんでした。ましてや実践の目標でも何でもないであります。だからこそ会長の個人的な所信の表明即ち、ターゲットと呼ばれていたのであります。

ところが、近年、何時知らずこのターゲットがR I理事会決議の裏打ちをもちまして、R Iテーマと呼ばれるようになりました。したがって、現在の手続要覧には、「会長の年次メッセージは、特定のプログラムあるいはテーマその他その発表の形式を問わず、当該年度におけるロータリープログラム遂行上、最大の重要性をもつものである。ガバナーが会長のプログラムもしくはテーマを取り上げ、あらゆる適切な方法によって強調することは、その役職と切り離すことのできない任務である」と記載されています。したがって、ターゲットが恰も奉仕の実践の目標になった感があります。そのことは、「会長のメッセージは、すべてのロータリークラブとロータリアンに知らせ、理解させ、効果的に実行されなければならない」と記載されている

ことから明らかであります。

このように、R I会長のメッセージについては、最近のR Iのロータリーに対する姿勢の変化が見られるのであります。

さて、そこで、今年度のR Iのテーマは、30年振りに日本から出ましたR I会長田中作次さんの「奉仕を通じて平和を」というのであります。

これは真に雄大なテーマでありまして、このテーマの核心にある思想は、勿論、世界平和の追求であります。

ロータリーは、今や将に世界中に拡大されています。しかし、今なお世界中に紛争の絶えることはありません。それは人類社会が紛争のない平和な世界を作り出すことが如何に困難であるかを示しています。

では、この難題を如何にして解決することが出来るのか。田中作次会長は、奉仕を通じてその平和を実現しよう、と提唱されています。

平和。それは、ロータリーの綱領第4に示されているようにロータリーの究極の悲願であります。殊に我が国は、原子爆弾の唯一の被爆国であります。世界中の如何なる国よりも平和を希求する思いが強いのであります。そして、今年度は5月に広島にて平和フォーラムが開催されます。これは、日本人のR I会長年度として真に時宜を得たものと思うのであります。

9. 「R Iのテーマ」 その2

前回は、R Iのテーマは、1953年以降、R I会長の個人的な所信の表明に過ぎなかったターゲットが比較的近年になってR I理事会決議の裏打ちをもってR Iテーマと呼ばれるようになったと申しました。

しかし、1953年以前にはロータリーの世界にターゲットなるものは無かったのであります。何故かと謂いますと、ロータリー運動としては「ロータリーの綱領（目的）」があれば十分でありまして、これ以外にR I会長の個人的な所信など全く必要としないからであります。

では、なぜターゲットを出したのか、と云いますと、恐らく1953年度のR I会長ホアキンS・シビルス氏が会長になった記念に何かアピールしようという気持から発表したものかと思われるのであります。

ロータリーの綱領は、ロータリアンが何十年もかけてロータリーの本体を見つめた結果出来上がったものであり、全世界のロータリアンの知性を結集した国際大会の決議でありますから、ロータリーの表現の中では最も優れたものと謂えるのであります。したがって、これは、ロータリーの般若心経とも謂うべきものでありまして、これをよく見つめることを通じて自分の心を反省すれば、ロータリーとは何か、と謂うことを自ずから理解することができるのであります。

このように、綱領は、ロータリーの目的であり、その崇高な理念を極めて簡明直裁に表現した素晴らしいドキュメントでありますから、これ以外にR I会長の個人的な所信の表明に過ぎないターゲットなど全く必要としないのであります。

果たして、その後、ターゲットなど要らない、という考え方のR I会長が現れました。アメリカ・オハイオ州出身の1976～77年度のR I会長ロバート・マンチェスター二世 Robert Manchester Jr 会長であります。

当時、毎年春に開かれる国際協議会ではR I会長エレクトがターゲットを発表することが慣例となっていました。彼は、ターゲットを出しませんでした。驚いたのは日本のガバナーエレクト達で、日本では既に新年度に向けて準備万端整っているのに、ここに来てR I会長の所信の表明がないのは困るというので交渉した結果、Robert Manchester Jr 会長エレクトは、仕方なくターゲットを出すことになりました。それは、「“奉仕” ロータリーを私は信奉する」と謂うものであります。折角、ロータリーが正しい方向に戻ろうとしたのに残念なことであります。結局、その後も毎年継続して発表されることが慣例になりましたが、当然のことながら、その中には、優れたターゲットもあれば、そうでないものもあります。これは人間の社会である以上当然のことであります。このことはR Iのテーマとなってからも同じことが謂えるのであります。

そこで、次回からは、従来発表されたターゲットやR Iテーマの中から優れたものについて若干紹介していきたいと思えます。

10. 「R I のテーマ」 その3

今日は、従来発表されたターゲットの中で私の最も好きなターゲットである1960-61年度のR I会長であったエド・マクローリン会長 (J.Edd McLaughlin) のターゲットを紹介いたします。それは、“You are ROTARY” 貴方がロータリーですよ。というのであります。ロータリーというのは、R I のことではない、ロータリークラブのことでもない。あなた方一人ひとりのロータリアンの心の中に宿るもの、それがロータリーなのですよ、と呼びかけているのであります。

実は、これは優れて英米法的な発想なのであります。英米法的なものの考え方によれば、国家というものは、政府でもない、国会でもない、国民一人ひとりの心の中に宿るもの、それが国家である、と考えるのであります。即ち、

英米法は、国家とは国民の総体であると考えます。しかし、国民が一億人集まっても、それだけでは烏合の衆に過ぎません。この人間の集団を国家という統一体にするためには、主権や統治権などのプラスアルファがなければなりません。

ヨーロッパ大陸法の考え方によれば、国家は、領土、国民及び統治組織によって成り立つと考えるのであります。英米法は、国家は領土と国民だけで成り立つと考えるのであります。

では、この主権や統治組織等のプラスアルファは一体何処にあるのか、と謂いますと、英米法は、国家というものは一億の国民の一人ひとりの心の中に宿る、即ち、国家は一人一人の国民に分属する、と考えるのであります。

日本国憲法の国民主権とか主権在民とか

いう思想も、その根底にはこの考え方があるのであります。日本では、明治の先覚者福沢諭吉先生が早くからこの考え方をとっておられました。

このように英米法は、国家とは一人ひとりの国民のことだと謂う立場をとるのであります。したがって、一人ひとりの国民が理性の命ずるところに従って自分の徳性を磨けば、その徳性の総和は、必ず国の政治に反映し、国家の徳性も上がって行くと考えるのであります。国家の徳性が上がれば、あの忌まわしい戦争も予防でき、平和な社会がおとずれると考えるのであります。

ロータリーもこれと同じであって、一人ひとりのロータリアンが自分の徳性を磨くことによって、業界や地域社会、国際社会の徳性が磨かれ、平和な明るい世界になるとマクローリン会長は説くのであります。

これは、一人ひとりのロータリアンの心の中にあるものが、窮極において世界平和の実現に繋がるという提唱であります。

このように、徳性を磨く、心を磨く、ということは、言葉を換えれば、私達一人一人がお互いに幸せを祈り合うことなのであります。そして、私達ロータリアンが、そして、世界中の人達がお互いに徳性を磨き合い、幸せを祈り合う世界、そのような平和な世界を実現することがロータリーの夢なのであります。

11. 「R I のテーマ」 その4

前は、McLaughlin 会長の平和な世界を実現することがロータリーの夢であると申しました。そこで今日は、その平和のテーマについて今年度の田中作次 R I 会長のテーマ「奉仕を通じて平和を」というテーマを考えてみたいのであります。

田中会長は今年の国際協議会において感銘深い話をされました。要約しますと、

「ロータリーに入るまで、私の人生観はとても狭いものでした。貧しい家の 8 人兄弟の 4 番目として生まれた私を取り巻く人達も、殆どが貧しい境遇にいました。週に一度母と私は、市場まで 20 キロの道を歩いて野菜を売りに行ったものです。日本人以外の方々とは一度もお会いしたことが無く、あの村が私の全世界でした。私は、若い頃、教育を受けたいと望みましたが、とても無理でした。お金が無かったのです。

友人達も私と同じような状況でした。

しかし、或る先生が私達のために東京のガラス工場に働き口を見つけ、社員寮に住めるように計らってくれました。そして、夜間学校への入学も手配してくれました。

先生は、私達 3 人の生徒と共に汽車に乗って私達を東京のガラス工場まで送り届け、寮や工場や夜間学校を案内して下さった後、自分は授業のために新潟に戻られました。

これは 57 年前のことです。その後、先生の思いやりを一度も忘れたことはありません。

日本では「シカタガナイ」という考え方があります。先生も私達百姓の子供を見て、読み書きだけは教えられるが、高等教育を受けるには貧しすぎるから「仕方がない」、自分にこの状況を変えることは出来ない、

と考えることは出来た筈です。

しかし、先生がとった態度は違いました。

それは「ワタシシダイ」、詰まり自分次第で物事は変わる、というものでした。子供達が自力で状況を変えられないことを悟った先生は、私達子供が自力で生きていくための助けの手を差し伸べてくれたのです。

今思えば、これは先生にとって容易なことではなかった筈です。インターネットのない時代、長距離電話も非常に高額な時代のことです。全てを手配するために、東京と何度も手紙をやりとりしたに違いありません。しかも、汽車賃を自分で払って私達を東京まで送り届けてくれました。これは、思いやりの心、助けたいという心があったからだと思います。そのお陰で、私達の人生は完全に変わりました。私達は、永年夢見てきた目標、勉強に励み、学問を身につけ、成功するという目標を果たすために頑張りました。

その時私は、「ワタシシダイ」という新しい生き方をみつけました。「ワタシシダイ」とは、物事は自分次第で決まると謂うことです。目標を立てそれを達成出来るかどうかは私達次第です。人々が自力で生きていけるよう助けられるかどうかは、私達次第です。そして超我の奉仕を實踐し「奉仕を通じて平和を」築けるかどうかは、私達次第なのです。超我の奉仕という言葉は、人生で本当に大切なこと、エネルギーを注ぐべきことは何なのかを私達に教えてくれます。そうすることでより平和な世界を築くことが出来ると考えます。そこで、私は 2012-13 年度のロータリーのテーマを「奉仕を通じて平和を」と致しました」と謂うのであります。

12. 「R I のテーマ」 その5

前回は、今年度の田中作次R I会長の「奉仕を通じて平和を」というテーマについて田中会長が国際協議会で話されたことだけを要約して申し上げました。

8人兄弟の4番目として生まれた田中会長は、貧しい境遇の中から或る先生に助けられて頑張ったお陰で、永年夢見てきた目標を果たされたのでありますが、そのとき田中会長は、「ワタシシダイ」という新しい生き方を見つけたと謂っておられます。

「ワタシシダイ」とは、物事は自分次第で決まると謂うこと、目標を立てそれを達成出来るかどうかは私達次第、人々が自力で生きていけるよう助けられるかどうかは私達次第、そして超我の奉仕 "Service above self" を実践し「奉仕を通じて平和を」築けるかどうかは私達次第、したがって、超我の奉仕という言葉は、人生で本当に大切なこと、エネルギーを注ぐべきことは何なのかを私達に教えてくれます。そうすることでより平和な世界を築くことが出来ると考えます、と述べておられます。

実に素晴らしい話であります。「ワタシシダイ」とは、田中会長の素晴らしい人生哲学であります。これは、貧しい家庭に生まれながら、素晴らしい先生との出会いを契機として、自らの努力で苦難の人生を切り開いた人、田中作次R I会長の素晴らしい人生哲学の提唱であります。殊に、恩師の先生の生き方は、将に超我の奉仕そのものであります。

また、田中R I会長は言葉を継いで『私は、超我の奉仕は単なる標語ではないと考えております。それは、誰の人生をも更に豊かで有意義なものにする生き方を示して

いると思います。

ロータリアンは、自分よりも、他人のニーズを重視します。自分のためだけではなく社会全体のためを考えます。超我の奉仕という言葉は、人生で本当に大切なこと、エネルギーを注ぐべきことは何なのかを私達に教えてくれる言葉です』とも述べておられます。

この田中作次R I会長の言葉は、日本ロータリーの創始者米山梅吉先生の言葉、「奉仕第一、自己第二」即ち、自分のことはさて置いて、先ず第一に世のため人のためのことを考えようという言葉と共通の境地にあるものであります。

このように致しまして、自分のことより、先ず人のことを考えよう、ということは、換言すれば、全ての人の幸せを祈ろうということになるのであります。

要するに、田中作次R I会長の期待は、全ての人の幸せを願うロータリアンとしての思いの深さを忘れることなく、職業社会、地域社会そして世界社会に対して、今何が必要なのか、そのニーズに対してどのような奉仕の実践が必要なのか、その問題点をはっきりと自覚して行動してほしい、という点にあるかと思うのであります。したがって、田中作次会長の「奉仕を通じて平和を」というテーマは、人類社会の全ての人の幸せを祈るということに万感の思いを込めた提唱であると私は理解しているのであります。

13. 「R I のテーマ」 その6

前は、今年度の田中作次R I会長の「奉仕を通じて平和を」というテーマは、人類社会の全ての人達の幸せを祈るということに万感の思いを込めた提唱であると申し上げました。

そこで今日は、この提唱と同じ境地にあるテーマを紹介しておきます。

それは、1962-63年度の国際ロータリー会長、インドのカル Катタ・ロータリークラブから出ました偉大なるロータリーの思想家ニティッシュ・ラハリー会長のターゲットであります。

『世界中の何処かの片隅に、一人でも不幸な人がいる限り、我々ロータリアンは永久に幸せになることが出来ない。心の中に火を燃やそう Kindle the spark within!』と謂うのでありまして、これは私の大好きな有名なターゲットの一つであります。ラハリー会長は東洋人として初めてR Iの会長になられた人でありますだけに、真に東洋的な神秘的なターゲットでありまして、心の中に火を燃やすことによって、この世の中を明るくしていこうというのであります。

そして、そのためには、私達がこの世の中の全ての人達の幸せを祈らなければならない、とラハリー会長は呼びかけているのであります。世界中の全ての人達がお互いに幸せを祈り合う、そのような社会になって、始めて世界平和が実現出来ると思うのであります。

ただ、一点疑問に思うのは、ラハリー会長の提唱は、ロータリーの理想としては真に崇高なものであり、素晴らしいものと思うのではあります。しかし、現実のインド社会を見ると、世の中の全ての人達が

果たして幸せになる可能性が少しでもあるのか否かは、かなり疑問であると思います。

何故かと申しますと、ご存知の通りインドは階層社会であります。したがって、カースト制度のように、一方に富裕な社会が存在し、他方に極貧の社会が存在するという格差社会が厳然として存在しています。しかも、このことを当然のこととして是認し、これを改めようとしない社会は、原理的にみてロータリーの万民平等の理想とは相容れないものであります。したがって、ここにはロータリーはないと謂うべきであります。

インドは、国民の僅か2%の人達が国の98%の土地を所有していると謂われています。この極端に貧富の懸絶した社会構造を改めると謂うことは一朝一夕に為し得ることはありません。したがって、貧富の格差をなくし万民平等の幸せな社会を築くことは、インドの為政者にとって将に永遠の課題であろうかと思うのであります。尤もこれはロータリーを越えた問題でありますから、インドのロータリアンとしては如何とも為し難い問題であります。しかし、国民一人一人の心の中にあるものが大きく社会を変えていくことを考えると倫理運動であるロータリーとしては意識改革に取り組むべき問題でもあると思うのであります。

14. 「私の公式訪問卓話より抜粋」 その1

今回から私の公式訪問卓話より抜粋して少し話してみたいと思います。実は、私は、23年前のガバナー公式訪問68クラブの卓話を全部録音しておりました。私の公式訪問スケジュールは、最初の2時間が会長幹事との懇談会であり、その後がクラブ会員に対する卓話、その後また2時間のクラブアッセンブリーというのが標準的なものでありました。

当時、私は、ガバナーの卓話というものは、そのクラブのお役に立つテーマで話すのがいいと思っていましたので、最初の会長幹事との懇談会で会長さんに、「今日はどのようなテーマでお話ししましょうか」とお尋ねして、謂わばリクエストを受ける形で卓話をしておりました。したがって、三題噺ではありませんが、ジャズの即興演奏のように当意即妙、速断即決で喋っていましたので、出来のよいのも悪いのもありました。その中で突拍子もないリクエストが二つありました。一つは高砂クラブであり、もう一つは西宮甲子園クラブでありました。

そこで高砂クラブであります。会長さんはお坊さんでありました。会長幹事懇談会の終わりに「卓話では何をお話ししましょうか」と尋ねましたところ、例会までによく考えてから例会でテーマを申し上げます、とのことでありました。

さて、例会が始まって会長挨拶の時、会長さんは道元禅師の話や以心伝心の話をしました。そして、突然、卓上の一輪の花を摘んで私に差し出し、ニコッと微笑みました。

目が笑っていました。私は即座に、「拈華微笑の話ですね」と応えますと「その通りです」とのことでしたのでテーマが決まり

ました。

ただ、ロータリーの例会でありますから、宗教の話だけするわけには参りません。一瞬考えた上で、「拈華微笑」のテーマでロータリーを説いたのであります。

「拈華微笑」というのは、御承知のとおり、お釈迦様が霊鷲山で説法したとき、一本の花をひねって聴衆に示したところ、誰もその意味が判らなかつたが、魔訶迦葉だけがその真意を悟って微笑したという故事でありまして、仏法の極意は、一本の花を拈って口元に微笑を浮かべることによって伝わる態のものであると謂うのであります。要するに、仏法の極意は、仏道を究めた者同士の心から心へ伝わる、即ち、以心伝心にあるというのであります。尤も、このような話でロータリーを説いたことにはなりません。そこで私は、道元禅師の言葉を引用して、ロータリーの思想を説いたのであります。

道元禅師の有名な言葉に、「仏道を習うとは己を習うなり。己を習うとは己を忘るゝなり」というのがあります。一方、ロータリーの思想には、"Service, Not self" と "Service above self" という二つの標語があります。そこで、道元の考え方からすれば、仏道を習うとは己を習うなり、というのは "Service above self" の思想であり、己を習うとは己を忘るゝなり、とは "Service, Not self" の思想に当たるのではないかと思うのであります。この二つの思想の話は、何れ稿を改めて致します。

以上、長々と小生の公式訪問の昔話を致しましたが、意のあるところをお酌み取りくだされば幸甚であります。

15. 「私の公式訪問卓話より抜粋」 その2

前回は、道元禅師の正法眼蔵にある有名な言葉「仏道を習うとは己を習うなり。己を習うとは己を忘るゝなり」を引用して、ロータリー思想の根底に流れる二つの思想を説きました。一つは "Service, Not self" であり、一つは "Service above self" であります。ただ、時間の関係で説明が不十分でありましたので補足しておきます。

先ず、"Service, Not self" は、ロータリーの奉仕 Service とは、Not self 即ち self を Not 否定すること即ち自己滅却、自己犠牲である。即ち、自分を滅却して、この宇宙を支配する神の秩序体系のもとに帰依することがロータリーの奉仕の全ての意味であると説くのであります。したがって、これは中世キリスト教神学の思想以外の何ものでもない優れて宗教的色彩の強い思想でありまして、自己否定、自己滅却、自己犠牲を説いているところから、これを道元流に謂えば「己を習うとは己を忘るるなり」に当たるのではないかと考えたのであります。この思想は、1911年の全米ロータリークラブ連合会で Benjamin Franklin Collins によって説かれたのに始まり、以後、グレン C. ミード、ラッセル F. グライナーその他歴代のロータリー指導者の信奉するところとなったのであります。日本では、ロータリーの創立者米山梅吉先生がこの思想の世界に生きた人でありました。

これに対し、Arthur Frederic Sheldon は、ロータリーは宗教ではないのだから "Service, Not self" のように自分を否定するのではなく、自分の存在を認めた上で、その上に奉仕 Service を考えるべきである、即ち、self" の above 上に奉仕を考えるべ

きだと説いたのであります。これは、宗教色、宗教倫理を否定して職業人としての実業倫理を説くものでありますから、私共はこれを「自己研鑽の奉仕」と訳しているのであります。したがって、これを道元流に謂えば「仏道を習うは己を習うなり」に当たるのではないかと考えたわけであります。この考え方は、Paul P. Harris も説くところでありまして、"Service above self" は、現在、ロータリーの公式の標語となっているのであります。日本では、米山先生の次の二代目ガバナー横浜クラブの井坂孝さんがこの思想の世界に生きた人でありました。

ところが、"Service above self" という用語は、英語の慣用例にはないそうでありまして、中世以来、奉仕 Service と謂えば、これ即ち自己否定、自己犠牲を意味するのであります。中世人が神に対して自己を主張するなど謂うことはあり得ないことであって、ひたすら謙虚に自己を否定して神に仕えることをもって奉仕 Service と考えたのであります。したがって、"Service above self" という用語は、20世紀初頭のロータリーの造語として現代に通用するようになったのではないかと思うのであります。なお、手続要覧では、"Service above self" を「超我の奉仕」と訳していますが、「超我」というのは自分を認めないことになるのでありますから、自己否定、自己犠牲であります。したがって、"Service above self" を「超我の奉仕」と訳するのは些か妥当ではないと思うのであります。

16. 「リーダーシップ」 その1

今日は、リーダーシップについて話します。まず、ロータリアンの集合体がロータリークラブであり、ロータリークラブの集合体が国際ロータリーでありますから組織の根本にあるロータリアンがその役割を果たさないと組織は滅びます。

さてそこで、ロータリアンが果たすべき役割の中で一番大事なものは一体何か。それは、一人ひとりのロータリアンのリーダーシップであります。

このことは何もロータリーに限ったことではありません。凡そ、あらゆる組織の長たる立場にある者すべてについて謂えることであります。

つい先日の総選挙において民主党が大敗を喫して国のリーダーが替りました。

神戸大学の元学長の新野孝次郎先生が、昨年のRYLAの話の冒頭で、今、イギリスで最もよく読まれている雑誌の一つであるロンドン「エコノミスト」の2010年6月号に「リーダーレス・ジャパン」というテーマの論説が載ったことを紹介されました。それは、鳩山元首相の幼稚性、菅元首相の自己決定能力なく権威あるものに従うという趣旨の記事でありました。そして、日本の雑誌「プレジデント」には、迷走民主党というテーマの論説が載りました。これは、ご存じの方も多いかと思います。

結局、民主党はリーダーシップを失って日本のリーダーが替わってしまったのでありますが、この「リーダーレス・ジャパン」という状況が今後どのように変わるのか。今将に日本は、この時期にこそリーダーシップを如何に発揮するか、が問われているのであります。現在の日本は、経済問題、

財政問題、外交問題、福祉問題そして教育問題その他あらゆる問題について不透明な時代であります。したがって、冷静な判断力、明確なビジョン、そして一番大事な誠実さ、これが日本のリーダーに問われているのであります。

では、ロータリーは一体どうなのか。実は昨今、国際ロータリーもロータリークラブも、そしてロータリアンもそのリーダーシップがかなりおかしくなって来たのではないかとも思われるのであります。特に、ロータリアンのリーダーシップが問題であります。

そこで、リーダーシップについて二つの問題点を考えて見たいのであります。一つは、世界的な視野をもつことであり、もう一つは、物事の本質を見抜くことであります。

では、先ず世界的な視野をもつには一体どうすればよいのか。

「木を見て森を見ず」という諺がありますように、常に大所高所に立って全体を考えることを忘れないことであります。このことは、とりもなおさず、空間的には広い目で物事を考え、時間的には永い目で物事を考えると謂うことであります。

これがリーダーシップを発揮するための基本前提であります。

17. 「リーダーシップ」 その2

前回は、リーダーシップを発揮するために世界的な視野をもつにはどうすればよいのかということについて、常に大所高所に立って全体を考えること、詰まり、それは、空間的には広い目で物事を考え、時間的には永い目で物事を考えることが大切であると申しました。そこで、ロータリアンは皆、地域社会や業界でリーダーシップを発揮している人達であり、同時にロータリーでもリーダーシップを発揮しています。したがって、ロータリアンのリーダーシップが大事であります。そこで一つ試験問題を紹介します。

昔、東京帝国大学の民法の権威であられた穂積重遠先生が講義の際に、黒板に「へのへのもへじ」流の大きな顔を描きました。

見れば右の眉毛がありません。先生の解説によると、これは或る幼稚園の入園テストだというのであります。

試験官は、一人ひとりの子供に「この絵で何が足りませんか」と聞きました。或る子供は「眉毛がありません」と答えました。

これは知能指数普通であります。また或る子供は「右の眉毛がありません」と答えました。これは満点であります。

ところが、一寸変わった子供が居まして「身体がありません」と答えました。なる程、顔ばかりで胴や足や手がありません。試験官は吹き出しました。教室の学生達も吹き出しました。

しかし、穂積先生は学生達に、『これは笑う訳にはいかない。何故かというと、人間には盲点というものがあるって「この絵で何が足りないか」と言われると、みんな絵の中を見てしまう。周辺や全体を見ない。

この子供は、賢くも全体を見た。「身体がない」と言うのは御名答である。君達も社会に出たら大所高所に立って、全体を考えることを忘れるな』と言われたのであります。

流石は民法の大教授であります。学生達にものを学ぶときの心得を説かれたのであります。「大所高所に立って、全体を考えることを忘れるな」これは、とりもなおさず、空間的には広い目で、時間的には永い目で物事を考えよと謂うことであります。

実は、これが世界的な視野をもってリーダーシップを発揮するための基本前提なのであります。

そこで、ロータリアンは皆、職業人として地域社会のリーダーであります。そのリーダー達がクラブの中で色々の役職を努めながらリーダーシップを発揮するのであります。したがって、ロータリーは、リーダーの中のリーダーを育てるのであります。そして、その育てる場が将にクラブ例会なのであります。異業種の良質な人達が毎週1回クラブ例会に集まって、企業経営上のアイデアや世のため人のためのアイデアを交換をします。その結果、ロータリアンは、社会の動向について先を見通すことが出来るようになります。謂わば先見性を取得することが出来るのであります。

そして、このことによって、世界的な広い視野を持つことが出来るようになるのであります。

18. 「リーダーシップ」 その3

凡そ真のリーダーが育つには、理論と実践の双方が大事であります。例えば、如何に理論的に優れた学者が大臣になったとしても、それで政治がよくなるものではありません。政治家としての実践を積んで初めて一国のリーダーたり得るのであります。

ロータリアンもこれと同じでありまして、学んだ理論を身をもって実践することによって初めてリーダーシップが身につくのであります。

そこで、実践が如何に大事か、ということについて一つの物語を紹介します。それは大燈国師の話であります。大燈国師は臨濟宗大徳寺派の総本山大徳寺の初代管長でありまして、24歳で禅の公案を全て解いたという秀才でありました。

ところで、大燈国師に印可を与えた老師は、「お前の修業は未だ半分だ。したがって、これから乞食になって更にあと24年間修業せよ。そうすれば、お前は大僧正になることが出来る」と言ったのであります。

そこで、大燈国師は、京都の三条の河原で乞食になって修業しました。そして、24年経って、後醍醐天皇の御代に召し出されて初代管長になったのであります。ただ、三条の河原には、沢山の乞食がいましたので、その中からどのようにして大燈国師を探し出したのか。これは譬え話だと思えますが、役人の中に大燈国師は大根が好きだったということを知っていた者がいて、乞食の一人ひとりに大根を突きつけて「無手にて取れ」と言って廻りました。乞食は何のことか判らず、ポカンとして全く反応がない。そのうち、一人の乞食が大根を突きつけて「無手にて取れ」と言ったと

ころ、「無手にて取ろう。無手にて出せ」と言いました。それでその乞食が大燈国師だと判った、という逸話が残っているのであります。

この物語は一体何を意味するのか。

初めの24年間は禅の公案を説く理論研究即ち、知識の世界であり、後の24年間はその知識を基にした体験による実践の世界であります。この実践によって初めて理論が身に付き、修業が完成することを教えているのであります。

要するに、頭の中で考えて理論が判っただけでは駄目でありまして、それを身をもって実践しなければならないのであります。

ロータリーもこれと同じでありまして、世の中には、ロータリーの理論を知識として弄ぶ者は枚挙に暇がありません。しかし、その理論を身に付いたものとして世のため人のために実践して初めて真のリーダーたり得るのであります。

そして更に、ロータリーを身につけるために、もう一つ大切なことがあります。それはただ、ロータリーへの思いの深さであります。才能とか天分ではなく、ただ偏にロータリーへの思いの深さが大切なのであります。ロータリーに対する傾倒の度合い、そしてプラス年輪であろうかと思うのであります。それが人としての光となり魅力となるのであります。したがって、ロータリーも大切であります。それ以上にロータリー以前が大切であると思うのであります。

19. 「リーダーシップ」 その4

今日は、真のリーダーが育つには何故実践が大事なのか、という話をします。

昔、始祖達磨大師がインドから海を渡って中国に法を説いて以来、その弟子である二祖慧可、三祖僧燦、四祖道信、五祖弘忍そして六祖慧能から日本に渡った禅宗の思想の流れを法脈というのでありますが、この六祖慧能という人は幼くして父を亡くし、東禅院の五祖弘忍の門をたたいて弟子になりました。そして、新参の慧能は、寺の最も下っ端の役の食事の世話役を命ぜられたのであります。

ある日、弘忍和尚は弟子達に対して、「儂も歳をとった。就いては後継者を定めたいが、仏法の世界は平等であるから、誰でもよい、菩提心即ち、人間が悟る心とは如何なるものであるかを偈に作って壁に掛けておくように」と命じました。

そこで、弘忍和尚の後継者だと自他共に許す一番上座の神秀は、「自分の身体は悟りの木であり、心は明るい鏡の台のようなものであるから何時も修行に勤めて拭き清め、塵が積もるようなことではいけない」と謂う意味の偈を書きました。

この偈を見た慧能は、「悟りの木と謂ってもそこに菩提樹の木があるわけではない。明るい鏡と謂っても心に鏡があるわけではない。本来無一物。本来は何もない。何もないところにどうして塵が積もるか」と謂う意味の偈を書きました。

翌朝、弘忍和尚はこの偈を見て、この慧能の偈は始祖達磨の思想に直結する。この慧能こそ自分の法脈を継ぐ弟子だと決めたのであります。そこで慧能を呼んで、「お前に印可を授ける。しかし、お前はこの寺

の一番下っばの僧侶だ。したがって、お前に印可を授けるとこの寺の階層秩序がひっくり返る。そこで、印可と宝物を授けるから夜陰に乗じて逃げろ」と言ったのであります。

そこで、慧能は夜明け前に寺から逃げ出して南の方へ行ったのであります。神秀がこれを知って刀を持って追いかけて、南の山の上で追いつきました。そして、慧能に「お前を殺す」と言いました。すると、慧能は、「殺すのはいいよ。しかし、私を殺すと法脈が断ち切れてしまうよ。だから、ここで一つ禅問答をしよう」といって、ここで有名な禅問答をして、結局、弘忍和尚の認定の通り、慧能が勝ったのであります。

そこで、慧能が偉かったのは、「これで私に印可が降りたことが判ったでしょう。だから貴方は北へ戻って隆々と栄えている弘忍和尚の寺を継ぎなさい。私はこれから南へ行って法を説きます」といって別れました。

この時、中国は宋の時代でありましたので、これ以来、神秀の北宋禅と慧能の南宋禅とに別れたのであります。神秀の北宋禅は結局弘忍和尚の法脈を継ぐことなく滅び、慧能の法脈は日本へ渡ったことにより日本でその法脈が承継されることになったのであります。この物語は、神秀の学識よりも慧能の禅の体験による実践が大事だという実践派の登場という禅宗史上有名な逸話なのであります。

ロータリーもこれと同じでありまして、理論・学識は勿論大事であります。それ以上に、例会出席の体験による実践が大事なのであります。

20. 「リーダーシップ」 その5

前は、リーダーにとっては理論・学識は勿論大事であります、それ以上に例会出席の体験による実践が大事であるという話をいたしました。今日はそのことについてロータリー思想の視点から集約してみたいと思うのであります。

ロータリーでは、先ず奉仕の心があって、その心が職業社会で実践されて職業奉仕となり、地域社会で実践されて社会奉仕となり、国際社会で実践されて国際奉仕となるのでありますから、ここで大事なことは、その奉仕の心が必ず実践されなければならない、ということでありませぬ。

如何に高い理想を説いても、その心が実践されなければ、それは絵に描いた餅、燃えない石炭のようなものであります。

しかし、何でも実践すればよい、というものでもありません。理論のない実践は、方向舵のとれた飛行機みたいなものであって、何処へ飛んでいくか判りませぬ。したがって、理論と実践の調和が必要なのであります。このことを説いたのが、1914年度の国際ロータリークラブ連合会会長 Frank L.Mulholland でありまして、その思想は1923年のセントルイス国際大会の決議23-34号の第4項に実を結んでいるのであります。

殊に Mulholland は、ここで理論と実践の調和を前提として特に実践の重要性を強調しているのであります。即ち、「ロータリーの奉仕とは、単なる心の状態を謂うのではなく、その心が行動として客観化したものを謂うのである」と断言しているのであります。

実は、ロータリーの思想の世界には、理論と実践との調和、親睦と奉仕との調和、利己と利他との調和など相反するものの調和を説く思想があります。したがって、私は、「ロータリーは調和の哲学である」とも考えています。

ただ、「調和」というのは、悪く言えば「妥協」であります。したがって、これは原理的には明快ではありません。原理的な明快度から言えば、Benjamin Franklin Collins のように、ロータリーの奉仕とは、自分を否定してひたすら神様のもとに帰依することである、と物事を一元的に割り切るほかはありません。

しかし、原理的に明快であることが果たして良いことなのかどうか。Paul P.Harris も当初は Sheldon と同じ立場にありましたが、1923年のセントルイス国際大会の決議23-34号の採択に際しては、Sheldon の立場を去って Frank L.Mulholland の立場に変わりました。この Mulholland の思想は、理論と実践の調和を説くものであり、これは、謂わば妥協の産物であります。

しかし、私は、理論と実践の調和を説く Frank L.Mulholland の思想によって、初めて真のリーダーが育つと思うのであります。例えば、原理的に明快な学者が大臣になったとしても、それだけで政治がよくなるものでもありません。このことは、ロータリーにおいても同じでありまして、ロータリーの理論を身に付けて、更にそれを実践することにより初めて真のリーダーが育つのであります。

21. 「地区大会」 その1

先週末、地区大会が開催されましたのでそのことについて少し話しておきます。

地区大会というのは、地区における只一人のR Iの役員であるガバナーが主催する年に一度の親睦と奉仕の祭典でありまして、ホストクラブが主催者ではありません。

地区大会は、R Iの大会の中では最も規模の小さい大会でありまして、最も大きいのが国際大会 International convention、その次ぎが地域大会 Regional conference、そして最も小さいのが地区大会 District conference なのです。

この大会規模の大小は、R Iの組織管理から来ているのでありまして、R Iは世界全体を6つの地域 Region に割り、Regionを更に34のゾーン Zone に割り、Zoneを更に地区 District に割りました。これは全て組織管理上の分割であります。そしてそれぞれの単位で大会を開いているのであります。尤も、このうち地域 Region という単位は、近年無くなりましたが、地域大会は開かれているようであります。この地域大会というのは、国際大会に参加できなかった人達のために国際大会の開催地より遠く離れた地域で開催される慣わしでありまして、第1回の太平洋地域大会はハワイのホノルルで開催され、第2回目が昭和3年に東京で開かれています。

この時のホストクラブは東京ロータリークラブでありました。当時は、未だ日本には8クラブしかなかった時代であります。

米山梅吉さん始め東京クラブの人達が大会費用を試算してみたところ、当時の金で約200万円という大金が必要でありました。しかし、クラブというものは、1年間の会費収入だけが唯一の財源でありますから、クラブ自体に200万円の金はありません。どうしたものか、と米山さん達が困っていたときに、後に至って日本の4代目のガバナーになる朝吹常吉さんが「私がその200万円出しましょう」といって出して

くれたのであります。これによって東京クラブは太平洋地域会議を成功裏に終えることが出来たのであり、これ偏に朝吹常吉の勇気によるものであったと日本ロータリー史に記録されているのであります。

また、地区大会については、米山梅吉ガバナーが昭和4年の第1回地区大会をやり直させたことは特筆に値します。時のホストクラブは京都ロータリークラブでありました。先程話しましたように、地区大会の主催者は、ガバナーであり、大会の企画、立案、実施は全てガバナーの専権事項なのであります。したがって、何故やり直させたのか、ということは、推測する他ないのであります。米山さんの質素な生活態度を考えますと、恐らく地区大会に芸者を呼ぶ類のことをやったために、それが米山さんの逆鱗に触れたのではないかとも謂われています。

元来、地区大会は、ガバナーによって色々な味が出てよいのであります。或るガバナーは親睦に重点を置く。また、或るガバナーは討議に重点を置く、というように色々あってよいと思うのであります。ただし、最近の地区大会は、派手に金を使いすぎます。これでは世間の誤解を招くと思うのであります。

昭和初期の日本の第3回目の地区大会を時のガバナー米山梅吉さんがやり直させたことがあります。地区大会の主催者はホストクラブではなくR Iの役員であるガバナーであることの確認をR Iから取り付けてのことであります。何故、やり直させたのか。清廉潔白な米山さんのことだから、恐らく芸者を呼ぶたぐいのことをやったのではないかと謂われています。真相は未だに判らないのであります。小堀先生が当時の京都クラブの古老の人達に聞いても、自分のクラブの名誉に関することなどではっきり言わなかったそうであります。

22. 「地区大会」 その2

前回は、最近の地区大会は派手に金を使いすぎる、これでは世間の誤解を招くと申しました。では、今から23年前の私のガバナー年度の地区大会はどうだったのか。

まず、結論を申しますと、質素・儉約そして全て手作りを旨として企画・立案・実施を致しましたので金が余りすぎました。当時の金で約2500万円ほど余剰金が出ました。ホストクラブは、勿論、伊丹クラブでありました。

R I 会長代理には日本画壇の重鎮相原求一郎先生をお迎え致しました。先生は、古き佳き時代のロータリーの思想・理論を身につけられた真に素晴らしいロータリアンであられました。もうお亡くなりになりましたが、奥様とは今も私共夫婦で親しくお付き合いをさせて頂いております。;

今、手作りの地区大会と申しましたが、地区大会の企画・立案・実施の全てに亘って電通などの業者を使わず、伊丹クラブの会員並びに奥様方が総動員で頑張ってくださいました。会場は、ホテルを使わずに尼崎の文化会館を使用したので、遠隔地からの大会参加者には宝塚ホテルに留まって頂きました。

地区大会実行委員長は、武内利熙会員の御尊父故武内利平会員、副実行委員長が故澤良雄会員でありました。或る時、澤会員が、地区大会の来賓の胸につける花の形のリボンは、ガバナーとR I 会長代理は特に大きいのを付けてもらいますと言いますので、私は、ロータリアンは皆平等・対等なのだから、リボンを胸につけるような特別扱いは止めようと提案しました。

しかし、澤会員は、ガバナーとR I 会長

代理は壇上に上がるのだから、リボンを付けないと格好が付かないと言います。私は、リボンなど大売り出しの看板みたいなものはつけない方が格好がいいと言ったのでありますが、彼は中々承知しません。そこで、私は、冗談で「その花のリボンが本物ならつけてもいいよ」と言ったところ、彼は即座に「そのアイデア買った」と言いましたので、結局、本物の蘭を来賓全員の胸につけてもらうことになってしまったのであります。将に瓢箪から駒が出たのであります。そのため大変な目に遇われたのが加藤拓会員の奥様でありました。何故かと言いますと、地区大会は二日間でありますから、第一日が終わると、リボンは本物の花でありますから、新しい蘭と付け替えなければなりません。加藤会員の奥様は、100名以上の来賓の花を殆ど徹夜でつけ換えて下さったのであります。私の迂闊な冗談から大変な御迷惑を掛けてしまったわけで、真に申し訳なく思いました。しかし、ことほど左様に当時の伊丹クラブの熱気は凄いものでありました。未だに頭の下がる思いが致します。

後日談になりますが、神戸須磨クラブの林会長の奥様真紀さんが大会4日後の伊丹クラブの例会にその時の蘭のリボンを「未だこの花は元気に生きてますよ」と大事に持ってきて下さったのには感動しました。

あの地区大会は、クラブ会員のみならず本当にいい人ばかりが集まって作り上げて下さったと思います。

23. 「地区大会」 その3

前は、私のガバナー年度の地区大会は、伊丹クラブの会員をはじめ沢山の善意に満ちた善い人達ばかりが集まって作り上げて下さったと申し上げました。

地区大会は、年に一度の親睦と奉仕の祭典であります。地区内のロータリアンが一堂に会して心を通わせ合い、仲よく奉仕に耳を傾ける絶好の機会であります。先ず、親睦につきましても、従来から、色々と工夫を凝らした催しものがありますが、奉仕に耳を傾ける機会である記念講演については、昔に比べると、その内容が少し淋しいようにも思います。

私のガバナー年度の記念講演は、"Japan as number one"の著者エズラ・ボーゲルさんに来て頂きました。これは、大会実行副委員長の澤良雄会員の奥様がエズラ・ボーゲルさんの日本における代理人とか謂うことでお願いをしたわけではありますが、流星に知性に満ちた素晴らしい講演でありました。

その他の年度の地区大会でも印象深い素晴らしい講演がありました。例えば、或る年度は、ロータリアン森繁久弥さんは、ロータリアンの奉仕の在り方について、百足の歩き方を例にとりて面白い話をされました。

それは、ロータリアンの奉仕は、皆が足並みを揃えて一致団結して団体奉仕をするべきだという考え方に対して、ロータリアンは個人奉仕であるから、例えば、百足の歩き方を見ても沢山の足がそれぞれバラバラに動くから早く歩けるのであって、百足が沢山ある足の右と左を揃えて、左右を代わるがわる前を出してヨイショヨイショと歩いたのでは、早く歩けない。したがって、ロー

タリアンの奉仕も、一人ひとりのロータリアンがそれぞれバラバラに自由闊達に自分独自の奉仕を実践するのがロータリアンの本来の奉仕の在り方である、という真に含蓄のある話をされました。私は、当時、このようなロータリアンの説き方もあるのかと、目から鱗が落ちた思いがしたものであります。

また、或る年度は、京都大学の高坂教授の印象深いヨーロッパ近代史の話がありました。例えば、スペイン、ポルトガルその他近代のヨーロッパ諸国では50年を超えて栄えた国はないが、ただ一つの例外はイギリスであった。イギリスは、グラスゴー大学のアダム・スミス教授の国富論によって自由貿易主義を採ったために200年の永きに亘って繁栄を続けることが出来たと謂うのであります。

私は、この話から、ロータリアンは世界的な広い視野と歴史的な永い視野をもつべきことを学ぶことが出来ました。

このように、地区大会では、親睦にしても奉仕にしても沢山の人間に出会い、沢山のことを学ぶことが出来ます。ロータリアンの目的の第1は、心の友を得て、もって奉仕の契機と為すべきこと、であります。このように、ロータリアンは出会いを保障しています。善き出会いによって人生が変わることもあります。したがって、ロータリアンは出会いを大切にしていきたいと思っております。

24. 「ロータリーの伝統」 その1

「伝統」というのは、辞書によりますと、或る民族、社会、集団の中で、思想、風俗、習慣、様式、制度、技術、しきたりなどの規範的なものとして、古くから受け継がれて来た事柄であり、また、それらを受け伝えることと謂われています。例えば、歌舞伎の伝統と謂うが如きものであります。

では、ロータリーの伝統とは、具体的には一体如何なるものか。ロータリーの伝統についても思想の伝統、習慣の伝統、制度の伝統など色々な視点が考えられますが、特に重要なものは、思想の伝統であります。

そこで、私達がロータリーの伝統というものを考える時に心に留めておくべきことが二つあります。

一つは、時間的には永い目でものを観ること、即ち、歴史的な視野を持つこと、一つは、空間的には広い目でものを観ること、即ち、世界的な視野をもつこと、であります。そして、何れの場合にも、目に見える現象に惑わされることなく、物事の本質を見抜く慧をもつことが大切であります。目に見える現象に惑わされるとは、具体的にはどういうことかと言いますと、例えば、1905年2月23日、Paul P.Harrisがロータリークラブを作るために、その第1回目の会合をシカゴの街のNorth DearbornのUnity Buildの711号室で開きました。そこは、鋳山技師のGustavas Loehrの事務所でありましたが、Paul P.Harrisは、洋服屋のHiram Shoreyにその事務所で落ち合うことを約束して、自分は石炭商のSylvester Shieleを誘ってその事務所へ行き、4人で最初の話し合いをしました。

ところで、Paul P.HarrisがSylvester Shiele

と一緒にGustavas Loehrの事務所へ行く途中でマダム・ガリというイタリア料理店に立ち寄っていますが、ロータリーをよく勉強している人達の中には、Paul P.Harrisがその料理店で何を食べたか、などということを楽しんで議論する人がいます。

しかし、そのような現象的なことは、ロータリーの歴史を勉強するについては重要なことではありません。このようなことに目が行っている間はロータリーの本質は永久に理解できないのであります。法律的には、このような事柄を「判決に影響を及ぼさない事実」と謂うのであります。即ち、1905年2月23日にPaul P.Harrisがマダム・ガリで何を食べようとも、兎に角ロータリークラブは出来たのでありますから、その4人の会合で何が話し合われ、何が決められたかが重要なのであります。何を食べたかなどそのような重箱の隅を穿るような議論をせずに、もっと大づかみに歴史の芯を掴んでいなければなりません。そのような姿勢がないと、ロータリーという制度の本質も、ロータリー思想の実体も会得することは出来なからうと思うのであります。

ロータリーの歴史は、本質史、思想史でありますから、思想を論証する原因の大まかな事実として、こういうことがあったであろう、と謂うことが判ればそれで十分なのであります。

25. 「ロータリーの伝統」 その2

前は、ロータリーの伝統の内では思想の伝統が特に重要であると申しました。

では、ロータリー思想の伝統の始まりは何時か、と申しますと、それは1910年、Paul P.Harris が「ロータリーは親睦と奉仕の調和の中に宿る」と大悟した時であります。これがロータリー思想の原点であります。

まず、Paul P.Harris は、1907年から親睦団体であるクラブに奉仕という考え方を採り入れました。この時の彼の考え方は、親睦よりも奉仕の方がより高次の概念であると考えましたので、奉仕が親睦と相容れない時には、親睦を抑えて奉仕が生きるべきだという立場を採ったのであります。したがって、当然のことながら、親睦が崩壊してしまったのであります。

そこで、Paul P.Harris は、ロータリーにおける親睦と奉仕とを上下の関係において捉えたことの誤りに気づきました。『親睦と奉仕は同じ次元の概念として捉えるべきであった。この両者は、ロータリークラブという社会制度において表裏一体の関係にある。いずれを優先させてもいけない。したがって、親睦と奉仕の調和の中にロータリーが宿る』と悟ったのであります。

Paul P.Harris は、その心を全米のロータリアンに訴えるべく論文を書きました。これが有名な論文 "Rational Rotarianism" であります。

これは、合理的な立場から考えて、ロータリーというものは、どのような特徴を持った思考なのか、ということ解説したものであります。

Paul P.Harris は、1910年、全米ロー

タリークラブ連合会の初代会長に選任せられた時から稿を起こし、脱稿したのが11月でありました。

ただ、当時は、未だ機関誌というものがありませんでしたので、Chesley.R.Perry が編集委員長になって "The National Rotarian" という機関誌を発刊したのであります。これは、やがてロータリーが国際的に発展するに及び National がとれて現在の "The Rotarian" となったのであります。時に、1911年1月26日のことでありました。

ところで、この "Rational Rotarianism" という論文において Paul P.Harris 曰く『自分は、ロータリーの創立者として、神様の思し召しにより、一段と高いところに登ることを許され、ロータリーとは何かと問われれば、自分は躊躇することなく、【寛容】 (toleration) と答えるであろう』と謂っています。

これが Paul P.Harris のロータリー理論、ロータリー=寛容論であります。したがって、彼は『ロータリーは、親睦と奉仕の調和の中に宿る』と自覚したわけであります。

『ロータリーとは、寛容である。親睦も大切だが奉仕も大切。奉仕も大切だが親睦も大切。寛容な心を持つこと。そして自分の考え方を人に押しつけてはならない。このような思考の中にロータリーはある』この Paul P.Harris の自覚がロータリー思想の原点であり、思想の伝統の始まりであります。

26. 「ロータリーの伝統」 その3

前回は、Paul P.Harris の「ロータリー寛容論」の自覚がロータリー思想の原点であり、思想の伝統の始まりである、と申しました。

ところで、「ロータリー寛容論」の中核にあるものは、親睦と奉仕との調和であります。これを如何にして調和させるのか、ということは、言うに易くして、これを原理的に理解するのは、かなり難しいものであります。何故かと謂うと、親睦というのは、ロータリアン相互の間で内部的に心を温めることであります。奉仕というのは、ロータリアンがクラブの外に向けて、ロータリアン以外の人達の幸せを考えることであります。したがって、エネルギーの方向が全く正反対でありますから、親睦と奉仕の調和ということは、かなり難しい課題でありました。

そこで初期のロータリアン達は、1907年時点においては、何らの先例もなかったので、何もないところから考えて行かなければならなかったのであります。

したがって、必然的に諸説乱立したのであり、どの考え方がロータリーの伝統となるのかということも必然的に紆余曲折を経ることになったのであります。

先ず、1911年、Arthur Frederic Sheldon は、全米ロータリークラブ連合会の大会において、"He profits most who serves best" という標語を発表して、自らが依って立つ実業倫理思想を明らかにしましたが、この同じ大会において B.F.Collins も "Service, Not self" という標語を発表して、自らが依って立つ宗教倫理思想の立場を明らかにしています。

Paul P.Harris は、この時点では B.F.Collins の考え方には批判的であり、したがって、同じく宗教倫理思想の立場にある 1912年の国際ロータリークラブ連合会会長 Glenn C.Meed や 1915年の同連合会会長 Dr.Allen D.Albert などの考え方には批判的でありました。そして、Sheldon の考え方を支持して、Sheldon と行動を共にしますが、やがて、1917年、Arch C.Klumph の国際理解と親善のための基金（後のロータリー財団）の設定に際しては、ロータリーの原理には反するとしながらも、善意で提唱され善意で実在化するに至ったものは大事にしようと呼びかけて Arch C.Klumph を支持しています。これも Paul P.Harris のロータリー寛容論の一つの適用場面であり、彼の考え方の広さを物語るものであります。

また、1911年頃から全米に澎湃として起こった身体障害者養護学校設立の運動については、その運動の頂点に立った Edgar Allen の即物的団体的奉仕の考え方を条件付で支持し、1923年の決議 23-34号の採択に際しては、Sheldon の立場を離れ、理論と実践との調和を説く 1914年の国際ロータリークラブ連合会会長 Frank L.Mulholland の思想に組み込んでいます。

このように、Paul P.Harris の思想遍歴は、かなり紆余曲折がありますが、しかしその思想の核心は一切ぶれることなく、ロータリー寛容論というものによって、今も厳然としてロータリーの伝統となっているのであります。

27. 「ロータリーの伝統」 その4

前回は、Paul P.Harris の思想遍歴は、かなり紆余曲折を経ながらも、その思想の核心は一切ぶれることなく、彼の寛容論として現在に至っていると申しました。そこで今日は、その思想遍歴の簡単な概要を紹介しておきます。

まず、Paul P.Harris は、1906年、当初、親睦だけのクラブに対し、Donald Carter の忠告を受け入れて世のため人のための考え方を提唱しました。

そして、この考え方が1908年、Arthur Frederic Sheldon によってロータリーの奉仕概念として完成すると、奉仕を親睦に優先させようとなりました。その結果、クラブは親睦派と奉仕派に割れて親睦が崩壊してしまっただけでありません。これが Paul P.Harris にとって第一の試練であり、教訓でありました。そして、その反省の中から「ロータリーは親睦と奉仕の調和の中に宿る」として寛容論を自覚したことによって、Paul P.Harris のロータリーの伝統が始まるのであります。

そこで、この時点では、Paul.Harris は Sheldon の奉仕理論に組みしていました。

即ち、世の中の困った人達を助けることは、悪いことではなく、何処かでしなければならないことではあるが、しかし、それは少なくともロータリーに本体的な奉仕ではない。弱者救済は本来、行政の為すべきことであって、ロータリーの奉仕は、原則として個人奉仕であり、精神的且つ非金銭的でなければならないという考え方であり、これが当時の伝統的なロータリー理論でありました。

ところが、1917年、第1次世界大戦

中に時の国際ロータリークラブ連合会会長 Arch C.Klumph は、国際奉仕を实践するために「国際理解と親善のための基金」（これは後のロータリー財団）の設定を国際大会に提案しました。これは、それまでの伝統的理論とは全く相容れない金銭的、団体奉仕を提唱するものでありましたから、当時のロータリアンは、誰も金を出しませんでした。これは事実上、議案の否決になり、Arch C.Klumph 会長が赤恥をかくことになります。

さればと言って、会長の考え方はロータリーの原理に反します。そこで、次の年度の国際大会のホストであったカンサスシティ・ロータリークラブは、『我々は、ロータリーの真髄に忠実なるが故に、このような原理に反する金を出したくない。しかし、金を出さないと会長が赤恥をかく。そこで、やむを得ず我々が人身御供になろう』と言って出した金が僅か26\$50セントでありました。

この時、Paul P.Harris は、『自分は、ロータリー運動の生みの親として、善意で提唱され、善意で実在するに至ったものならば、例え原理的には間違っているとしても、その因縁は大事にしなければならない。正しいとは言わない。しかし、ロータリー運動史上、実在するに至った以上は大切にしよう』。これは、ポール・ハリスのロータリー寛容論の一つの現れであります。自他を峻別して、あれは原理に反して駄目だといって絶対に認めないのではなく、大きく自他を包摂して育てていくのであります。これは指導者として大事なところでもあります。

28. 「ロータリーの伝統」 その5

前回は Paul P.Harris が、Arch C.Klumph の団体的金銭奉仕の提唱について、善意で提唱されたものは、たとえそれが原理に反してもその因縁は大事にしなければならないとして支持したと謂いましたが、それは当然のことながらロータリーの伝統的理論、殊に Sheldon とは全く相容れない考え方でありました。しかし、その時点では Paul Harris と Sheldon との間に意見の対立はなかったと思われま

す。ところが、一方、1910年以降、全米に澎湃として起こっていた身体障害者養護学校設立の運動について、オハイオ州エリリア・ロータリークラブの Edger Allen が1917年、身体障害者養護協会を設立して、その初代の理事長に就任し、一躍この運動の頂点に立ったことが契機となって、Edgar Allen とロータリーの伝統的理論派との葛藤が始まり、結局、両者の葛藤を解決する案件が1923年のセントルイスの国際大会の34号議案として提案せられたのであります。

この大会はロータリー分裂の危機があったと謂われる程の大喧嘩となりましたが、当時のシカゴクラブの会長 William Westberg とナッシュビルクラブの Will R.Manier Jr の2人によって共同提案された代案である34号議案について、円満に大会決議を取り付けることに成功したのであります。

彼らは、この代案によって二つの目的を達成しました。即ち、

第1は、ロータリーの原理の世界の葛藤を悉く国際大会の決議をもって解決したこと、これが一つ。第2は、その枠組みの中で、

Edger Allen が提唱しているような団体的金銭的な社会奉仕を一定の条件の元でロータリーの正当な奉仕として組み入れたということ、これが一つであります。

ところで、決議34号は、表面的には、伝統的理論と Edger Allen との争いですが、ロータリーの原理形成の面から分析しますと、伝統的理論と1914年の国際ロータリークラブ連合会会長 Frank L.Mulholland との争いであったと謂えるのであります。それはどういうことかと言いますと、伝統的理論は奉仕の心を作ることが重視しましたが、その心を実践することが伴わない傾向がありました。Frank L.Mulholland は、身体障害者養護学校設立の運動に身を投じた経験から決議23-34号第4項において、ロータリーの奉仕とは、単なる心の状態に尽きるものではなく、その心が実践されるに至って初めて客観化される行動の哲学のことを謂うとして、精神と実践との調和、理論と実践との調和を説いたのであります。これは当然のことながら Edgar Allen の考え方に加担するものであります。Paul P.Harris は、この時は Sheldon に加担せず Frank L.Mulholland の考え方に加担したのであります。この結果、Sheldon の立場と異なる方向に決議がなされたのであります。このことが原因かどうかは判りませんが、Sheldon は、その7年後の1931年、ロータリーを去りました。

しかし、Paul P.Harris の寛容論の伝統は、それ以後も連綿として現在に受け継がれているのであります。

「平和と命」

第35回RYLA総括

25.3.24

深川純一

先ず、簡単に自己紹介をします。私は、職業は弁護士であります。兼職として大阪高等学校という学校法人と伊丹社会事業協会という社会福祉法人の理事長職を預かっております。これだけのことを申し上げて、時間がありませんので早速、話に入りたいと思いますのであります。

さて、毎年のRYLAの最終日の今日の講義は、RYLA顧問の今井鎮雄先生がRYLAの総括として素晴らしい講義をされて幕が引かれることになるのであります。今年は今井先生が急に体調を崩されたので、私がピンチヒッターをすることになりました。

実は、このRYLAでピンチヒッターが出るのは、RYLA35年の歴史の中で私が二人目であります。では、最初は誰かといいますと、今から丁度35年前の第1回RYLAで今井先生がピンチヒッターを務められました。この時は、関西学院の心理学教授の田中国夫先生が講義をされる予定でありましたが、田中先生の恩師がRYLAの直前にお亡くなりになったため、急遽、今井先生がピンチヒッターを務められることになったのであります。今井先生はその講義の初めに「羊頭を掲げて狗肉を売る」ようなことになって誠に申し訳ないと言われておられましたが、狗肉どころではない、真に素晴らしい話をなさいました。私は、

その講義に強烈なインパクトを受けたわけでありまして、その時教わったことをその後も時々引用させて頂いております。今井先生の講義は、将に「羊頭を掲げて羊頭を売る」ものであります。しかし、私には、羊頭など掲げることは到底出来ません。そこで、私は、「狗肉を掲げて狗肉を売る」ことになろうかと思えます。暫くお付き合いを願います。

さて、今回のRYLAのテーマは、「平和と命」であります。このテーマを考える時、私達は、過去から現在にかけて如何に生きたか、そして、現在から未来へかけて如何に生きるか、を考えなければなりません。

先ず、平和については、従来、沢山の人が色々な視点から論じてきました。

平和という言葉から反射的に思い出される言葉は戦争であります。文豪ニコラビッチ・トルストイにも「戦争と平和」という有名な著作があります。

しかし、平和とは戦争のないことだけではありません。私達の家庭に夫婦喧嘩のないことも平和であり、心の中に葛藤がないことも平和であります。強いて謂えば戦争中でも平和なときがあります。

そこで、話の焦点を絞ります。そして、取り敢えずは、戦争というものを中心に世界的な視野で考えてみたいのであります。

まず、一つの試験問題を紹介して話に入っていきたいと思うのであります。昔、東京帝国大学の民法学の教授穂積重遠先生が教室の黒板に「へのへのもへじ」流の大きな顔を描きました。見れば右の眉毛がありません。先生の解説によりますと、これは或る幼稚園の入園テストだというのであります。

試験官は、一人ひとりの子供に「この絵で何が足りませんか」と聞きました。或る子供は「眉毛がありません」と答えました。

これは平均点で合格であります。また或る子供は「右の眉毛がありません」と答えました。これは満点であります。

ところが、一寸変わった子供が居まして「身体がありません」と答えました。なる程、顔ばかりで胴や足や手がありません。試験官は吹き出しました。教室の学生達も吹き出しました。

しかし、穂積先生は学生達に、『これは笑う訳にはいかない。何故かという、人間には盲点というものがある。「この絵で何が足りないか」と言われると、みんな中を見てしまう。周辺や全体を見ない。この子供は、賢くも全体を見た。「身体がない」と言うのは御名答である。君達も社会に出たら大所高所に立って、全体を考えることを忘れるな』と言われたのであります。

流石は民法の大教授であります。学生達にものを学ぶときの心得を説かれたのであります。「大所高所に立って、全体を考えることを忘れるな」これは、とりもなおさず、空間的には広い目で、時間的には永い目で物事を考えよと謂うことでもあります。

そこで、今日はまず、皆さん達リーダーにとって大切な二つのことを話します。

一つは、世界的な視野をもつことであり、一つは、物事の本質を見抜くことであります。

では、まず、世界的な視野をもつには一体どうすればよいのか。

それには、まず、過去を顧みて人間の思想の歴史に学ぶべきであります。これが今日の話の底流に一貫して流れる裏のテーマであります。

まず、東京大学文学部教授の加藤陽子先生が「それでも日本人は戦争を選んだ」というテーマで素晴らしい本を書いておりますので、その中から今日のテーマに関連するところを引用させて頂いて話に入っていきたいと思うのであります。

2001年9月11日、アメリカで起こった同時多発テロの衝撃に接した時、人々は、テロを「曾てなかった戦争 War like no other」と呼んで、まずその新しい戦争の形態上の特質、詰まり「形」に注目しました。その新しい形というのは、旅客機をハイジャックしたテロリスト達が、アメリカ人にとって象徴的な建物であるニューヨークのツインタワービルに突入し、戦争の宣戦布告なしに多くの非戦闘員、民間人を殺害したというものでした。これは、敵とするアメリカ内部に入り込み、普通の市民が毎日でも利用する飛行機を使いながら、生活や勤労の場を奇襲するというやり方であります。

ここで大変重要なことは、内部から日常生活に密着した場での攻撃を受けたアメリカにとって、このテロは、相手国が国を挙げてアメリカに向けて仕掛けて来た戦争と謂うよりは、国内にいる無法者が、何の罪もない善意の市民を皆殺しにした事件、し

たがって、国家権力によって鎮圧されてよい対象と見なされます。

国と国との戦争であれば、それぞれに戦争にならなければならなかった経緯があり、それぞれの国が、戦争に訴えなければならなかった正当性を言い張るのは何時の時代も同じことでありますが、9.11の場合におけるアメリカの感覚は、戦争の相手を打ち負かすと言う感覚よりは、国内社会の法律を犯した邪悪な犯罪者を取り締まる、というスタンスであったように思われます。そうなると、戦いの相手を当事者として認めないような感覚に陥って行くことになります。

実は、このアメリカの話と似たようなことが1930年代の日本でも起きていたのがあります。それは一体何か。と言いますと、1937年・昭和12年7月7日、北京郊外の盧溝橋で起こった日中の軍事衝突であります。これは瞬くまに全面戦争へと拡大しましたが、戦争の開始から約半年後の1938年1月16日、近衛内閣が発した声明は、「爾後、国民政府を相手とせず」という声明でありました。

戦争の相手国を眼中に入れずにどうするのだ、と普通なら思いますが、当時の軍人達や近衛内閣のブレイン達は、そのように考えなかっただけでなく、戦争に対してもっと不思議な見方をします。

例えば、1939年の1月には、中国と戦争をしていた出先の日本軍即ち、中支那派遣軍の司令部は、「今次事変は戦争に非ずして報償なり。報償のための軍事行動は国際慣例の認むるところ」、詰まり、今日本が行っていることは戦争ではなくて「報償」なのだから、この軍事行動は国際慣例

でも認められているものだと言っているのであります。

では、報償とは一体何か。それは、相手国が条約に違反したなどの悪いことをした場合、その不法行為を止めさせるため、今度は自分の方が実力行使をしてもいいですよ、という考え方であります。中国が日本との条約を守らなかったから、守らせるために戦闘行為をしている、と言うのが当時の日本軍の言い分でした。

しかし、その当時の国際慣例で認められていた「報償」の事例は、もっと軽い意味のものでした。例えば、相手国が条約を守らない場合に容認される対抗的な実力行使とは、相手国の貨物や船舶を抑留して困らせるというようなことでありました。したがって、1937年8月から本格化した日中戦争が報償の概念で認められる範囲の実力行使であった筈はないのであります。

以上は軍人達の話であります。近衛内閣のブレイン達の書いた史料の中にも、日中戦争をとっても不思議な表現で呼んでいる例が出てきます。彼らはこの戦争を「一種の討匪戦」とみていました。討匪戦というのは、匪賊即ち、国内で不法行為をする悪者を征伐すると謂うことであります。

何れにしても、日中戦争の日本は、これは戦争ではないとして、戦いの相手を認めない感覚を持っていたのであります。この意味では、2001年時点のアメリカと1937年時点の日本とが同じ感覚で戦争をみている。即ち、相手が悪いことをしたのだから武力行使をするのは当然であり、しかも、その武力行使を恰も警察が悪者を取り締まるような感覚で捉えていたことが解るのであります。

このように、時代も背景も異なる二つの戦争を比べることで、30年代の日本、そして、現代のアメリカという、一見、全く異なる筈の国家に共通する根底にある部分が見えてくるのであります。歴史の面白さの真髄はこのような比較と相対化にあるのであります。これは、戦争というものを一つの切り口とした近代史の一断面であります。

そこで、国の指導者即ち、リーダー達が自国の平和を守るために如何に智慧を絞っているか、という話に移ります。

ご存じのとおり、日中戦争は、全く偶発的な戦闘から始まりました。この戦争が何故拡大したのか。これについては色々な視点がありますが、先ず中国の外交戦略から見てみます。

蒋介石は、軍のトップとして中国国民政府を統率した人でありましたが、彼は軍事に関してのみならず外交などの分野では、外務官僚という専門のキャリアを持った人だけでなく、優れた才能を持つ人物を抜擢したことで知られています。

例えば、1938年に駐米大使となった「胡適」という人は、北京大学教授で社会思想の専門家であり、物凄く頭のいい人で、彼の手紙によって当時の中国側の外交戦略はかなり明らかにされています。この胡適は、1941年12月8日、日本が真珠湾攻撃を行った時にも駐米大使としてワシントンにいました。

実はこの胡適の話は、鹿錫俊という中国に生まれ一橋大学で博士号をとった大東文化大学の先生が明らかにしたことであります。

胡適は、日中戦争の始まる前の1935年、「日本切腹・中国介錯論」という考えを唱えます。凄いテーマであります。日本

の切腹を中国が介錯するという。介錯というのは、切腹する人の後ろに立って、切腹の作法通りに腹を切ったその人の首を切り落とす役割のことです。

では、その当時の世界に対する胡適の見方はどのようなものであったのか。

先ず、中国は、この時点で、世界の2大強国となることが明らかになってきたアメリカとソビエト連邦、この2国の力を借りなければ救われないと見なします。日本があれだけ中国に対して思うままに振る舞えるのは、アメリカの海軍増強とソビエトの第2次5カ年計画が未だ完成していないからである。

海軍、陸軍共に豊かな軍備をもっている日本の勢いを食い止めることが出来るのは、アメリカの海軍力とソビエトの陸軍力しかない。

このことを日本側はよく自覚しているので、この2国の軍備が完成しないうちに日本は中国に決定的なダメージを与えるために戦争を仕掛けてくる筈である。詰まり、日米戦争や日ソ戦争が始まる前に日本は中国と戦争を始める筈であるというのであります。

実際の太平洋戦争は1941年12月始まりましたし、日ソ戦争は太平洋戦争の最終盤、1945年8月に始まるわけですが、日中戦争は1937年7月に始まっています。

胡適の考えは続きます。これまでの中国人は、アメリカやソビエトが日本と中国の紛争、例えば、満州事変や華北分離工作などに干渉してくれることを望んでいました。しかし、アメリカもソ連も自らが日本と敵対するのは損なので、土俵の外で中国が苦しむのを見ているだけだ。それならば、

アメリカやソ連を日本と中国との紛争に介入させるにはどうすればよいか。土俵の中に引き込むにはどうすべきか。

一つの方法は、国際連盟にもっと強く介入させるように色々な形で日本の酷さをアピールすること、即ち蒋介石が採った方法を更に進めるという方法であります。連盟は力にはならなかったし、アメリカは連盟に加盟していませんでした。そこで、胡適は、「アメリカとソ連をこの問題に巻き込むには、先ずは中国が日本との戦争を引き受けて、2, 3年間負け続けることだ」というのであります。このような考え方を蒋介石や汪兆銘の前で断言できるのは凄いことでもあります。こんなことは、日本の政治家には絶対に言えないこと、内閣の閣議や天皇の御前会議では絶対に言えないことでもあります。ところが、胡適は堂々と言い切っているのです。

実際、1935年までの時点では、日本と中国とは大きな戦闘はして来ませんでした。満州事変、上海事変、熱河作戦、これらの戦闘はどちらかと言えば早く終わっています。特に満州事変では、蒋介石は張学良に対して、日本軍の挑発に乗るなど言って早く兵を退かせています。

しかし、胡適は、これからの中国は絶対に逃げては駄目だと言います。龐大な犠牲を出してでも、中国は戦争を受けて立つべきだ、寧ろ中国が先に戦争を起こすくらいの覚悟をしなければいけない、というのであります。

一体、日本の政治家で、このような暗澹たる覚悟を謂える人がいるでしょうか。選挙民の機嫌ばかり取って目先のことしか考えない、そして世界的な視野のない政治

家には想像も出来ないことであります。

では、胡適は、具体的には一体どのようなことを謂っているのか。

先ず、「中国は絶大な犠牲を決心しなければならない。この絶大な犠牲の限界を考えるにあたり、次の三つを覚悟しなければならない。

第1に、中国沿岸の港湾や長江の下流域が全て占領される。そのためには、日本は海軍を大動員しなければならない。これが第1。

第2に、河北、山東、チャハル、綏遠、山西、河南という諸省は全て陥落し、占領される。そのためには、日本は陸軍を大動員しなければならない。

第3に、長江が封鎖され、財政が崩壊し、天津、上海も占領される。そのためには、欧米と直接に衝突しなければいけない。

我々は、このような困難な状況下におかれても、一切顧みないで苦戦を堅持していれば、2, 3年以内に次の結果は期待できるのであろう。「中略」

満州に駐在した日本軍が西方や南方に移動しなければならなくなり、ソ連は、つけ込む機会が来たと判断する。世界中の人が中国に同情する。英米及び香港、フィリピンが切迫した脅威を感じ、極東における居留民の利益を守ろうと、英米は軍艦を派遣せざるを得なくなる、太平洋の海戦がそれによって迫ってくる」

実に見事な論説であります。これは、加藤陽子先生が、先ほどの鹿錫俊先生による訳文から引用されたものでありますが、この思想は実に徹底しています。

加藤先生は引き続いて説かれます。

それは、このようなことを蒋介石や汪兆

銘に対して堂々と述べていた胡適のような人物が駐米大使となって活躍する。このような中国の政府内の議論をみて感心するのは、本当の「政治」がしっかりと行われていると謂うことであります。

日本のように軍の課長級の若手の人達が考えた作戦計画が、これも若手の各省庁の課長級の人達との会議で形式が整えられ、ひょいと閣議にかけられて、そこでは、あまり実質的な議論もなく、御前会議でも形式的な問答で終わる、という日本的な形式主義ではありません。

胡適の場合、3年はやられる。しかし、そうでもしなければ、アメリカとソビエトは極東に介入してこない、という真に暗い覚悟を明らかにしています。凄い覚悟であります。窮極の平和を勝ち取るために、歴大な「命」が失われることを覚悟しています。

これが1935年時点の胡適の予測であります。それなのに、その10年後の1945年までの実際の歴史の流れを正確に言い当てています。

そこで、纏めとして、胡適の論の最後の結論の部分を紹介しておきます。

「以上のような状況に至って、はじめて太平洋での世界戦争の実現を促進できる。したがって、我々は、3、4年の間は、他国参戦なしの中国単独の苦戦を覚悟しなければならない。日本の武士は切腹を自殺の方法とするが、その実行には介錯人が必要である。今日、日本は全民族切腹の道を歩いている。このような戦略は「日本切腹、中国介錯」というこの8文字に纏められよう。」

というのであります。真に凄い切り込みであります。皆さん如何ですか。

私は、私達が平和を求める時にも、時には肉を切らせて骨を切る、骨を切らせて髓を切るというほどの強い自覚がなければ、本当の平和は勝ち取れないのかも知れません。胡適の考え方は平和を求める私達にとって一つの参考になろうかと思うのであります。

さて、「平和と命」ということで直ぐに思い出すのは、あの第二次世界大戦で心ならずも散っていった沢山の若者達の「命」のことです。

今から約5、6年前のこと、“十二月八日八月十五日”という俳句がテレビで放映されていました。成る程、五、七、五の十七音、俳句の形にはなっています。しかし、この句、季語は一体何か、ということになると、十二月は冬の季語であり、八月は秋の季語であります。したがって、この句は冬の句なのか、秋の句なのか問題になりましたが、この句は、十二月九日に発表されていますので、恐らく作者は、戦争が始まった十二月八日を念頭において作ったものと思われれます。

何はともあれ、「十二月八日八月十五日」というこの俳句の良し悪しは兎も角として、私達の世代にとってこの二つの日が忘れられないのは、太平洋戦争の始まった12月8日とその戦争がおわった8月15日のことだからであります。将に、12月8日に戦争が始まって、8月15日に平和が始まったのであります。

12月8日の朝のことは今でも鮮明に覚えています。当時、私は小学校6年生でした。ラジオで大本営発表を聞きました。親父は、『えらいことになった』と言ってい

ました。私は、それから学校に行きました。

その日の内に赫々たる戦果が発表されました。然し、その後、戦況は次第に悪くなり、遂に5年後の8月15日の終戦を迎えることになったわけでありました。

当時、私は、中学4年生であり、勤労働員で住友電工へ行っていましたが、その日は工場が休みだったのかどうかよく覚えていませんが、自宅に居てラジオで終戦の詔勅を聞きました。その時の率直な感想は、虚脱感と共にもう戦争で死ぬことはなくなった、ということでありました。当時、未だ16歳でありましたから、この戦争で沢山の人が亡くなったという意識は全くありませんでした。それは、情報管制のためそのような情報は全く聞かされていなかったからであります。

ところで、8月15日のことで私が心を打たれた話を一つ紹介しておきます。それは私の親友のことです。今でも時々会って旧交を温めています。

今、仙台にいる彼は私より4歳年上です。ありますが、終戦当時、江田島の海軍兵学校に在学中でありましたが、戦後68年経った今でも毎年、8月15日には、必ず日本の何処かに行って、戦争で命を失った人の冥福を祈っています。私達は、この心を忘れてはならないと思うのであります。

彼は、戦争が終わってすぐ、江田島の海軍兵学校から故郷の仙台へ帰る途中で見た情景は凄惨そのものであったと言います。原爆で焼き尽くされた焼け野原の広島、累々たる屍骸、紛々たる死臭、もの音一つしない静まりかえった焼け野原に月の光が煌々と照らしているという将に死の町であったと言っていました。

恐らくこの時の衝撃的な体験が、彼をして8月15日に若くして死んでいった人達の冥福を祈らしめたのであろうと思います。

ところで、私は、5、6年前の12月8日、今日は太平洋戦争の始まった日だからと一冊の本を買いました。それは百田尚樹著「永遠のゼロ」という本であります。「平和と命」という問題を考えるとき、若い皆さん達には是非読んで頂きたい本であります。

それは一人の海軍のパイロットの物語であります。この人は、昭和11年に始まった日中戦争の時から、当時、世界最高の性能を誇った三菱零式艦上戦闘機、所謂「ゼロ戦」のパイロットとして抜群の技術を持ち、海軍の至宝と言われた人でありました。

しかし、この人は、愛する奥さんのために絶対に死にたくない、と言い続けながら、遂に終戦の直前に特攻隊として死んで行ったという真に悲しい物語であります。

この物語は日中戦争の始めから太平洋戦争の終わりまで、ゼロ戦の活躍を中心にこの戦争の悲惨さを紹介しています。そこで、今日は、この本の中の「命」に関するところを拾い読みしながら紹介してみたいと思います。

さて、第2次世界大戦、日本がアメリカと戦争をしたとき、日本の若者達は、特別攻撃隊（特攻隊）として、特攻機に乗り、或いは人間魚雷に乗って、アメリカの軍艦に体当たりして死んで行きました。

或る人は、これは今、イスラムで起こっている自爆テロと同じであると言います。

果たしてそうでしょうか。私は違うと思います。日本の特攻隊とイスラムの自爆テロとは根本的に違うところがあります。

特攻隊で死んで行った当時の青年将校達は、未だ24～5才の若さでありました。下士官達は、20才にもなっていない子供（未成年）でした。

しかも、彼らは、皆、自ら志願して天皇陛下のために喜んで死んで行ったという人が居ます。果たしてそうでしょうか。これは、特攻で死んでいった人達の遺書を見てこのように言っているようではありますが、これは余りにも遺書を書いた人の心を読み取れない哀れな人だと思っております。

人間は、誰でも命が惜しい、『生きたい』という本能的欲求を持っています。にも拘わらず、軍の命令で死ななければならないということについて、どのように自分を納得させたのでしょうか。

恐らく、自分が死ぬことによって、父母や姉妹達が生き延びて幸せになると信じて、自分を納得させていた人達も多かったでしょう。そのようにして死ぬことが国のために生きる只一つの道だと納得させたのかも知れません。

若者達は、戦争に勝つために、国のために、家族の幸せのために、とあって、自分の命を国に捧げていったのだと思います。

当時、私は、未だ14～5才でしたが本能的に死ぬのは嫌だなと思いつつも、いずれ20才になれば、戦争に行つて死ななければならないとは思っていました。そのように教育されていたので、そのことを信じて疑いませんでした。戦争は嫌だ、平和が欲しいなどと夢にも思ったことはありませんでした。

事実、私の同級生の中には、中学から志願して予科練（海軍飛行予科練習生）や海軍兵学校（海兵）、陸軍士官学校（陸士）

へ行った者もいました。

広島県の呉市の近くに江田島という島があります。昔、海軍兵学校があったところでもあります。そこは海軍のエリートを養成するところでありました。昔の中学4年生から、或いは中学5年を卒業して3年間の教育を受けて、海軍士官（海軍少尉）に任官するのでありますが、当時未だ、20才にもならない若者達であります。

この海軍兵学校、今は、海上自衛隊の幹部候補生の養成学校になっていますが、その「教育資料館」に行くと、若き彼らが、自分の命を捨てて「死ぬ」ということについて、どのように自らを納得させて死んでいったかが、沢山の遺書に書き記されています。

彼らは、特攻の命令を受け、死に直面して、皆、両親のこと、妹や弟のこと、特に、お母さんのことを綿々と書き残しています。私は涙を禁じ得ませんでした。

実は、特攻隊員の遺書を見て、それが特攻隊員の本心だと受け取ることはできないと思います。当時の手紙の多くは、上官の検閲がありました。時には、日記や遺書さえも検閲されていました。戦争や軍部に批判的な文章は許されなかったのであります。

また、軍人にあるまじき弱々しいことを書くことも許されなかったのであります。

特攻隊員達は、そんな厳しい制約の中で、文章の行間に思いを込めて書いたのであります。それは、読む者が読めば読み取れるものであって、一死報国だとか忠君愛国とかいふ言葉に騙されてはならないのであります。喜んで死ぬと書いてあるからといって本当に喜んで死んだと思つてはなりません。遺書を書いた人の本当の心を読み取る

なければ読んだことにはならないのであります。

もし、特攻隊員が遺族に書く手紙に『死にたくない。悲しい。辛い』などと書いたら、それを読んだ両親がどれほど悲しむか判りません。大事に育てた息子が、そんな苦しい思いをして死んでいったのか、と知った時の悲しみは、如何ばかりか計り知れないものがあります。

特攻隊員が死に臨んで、せめて両親には、澄み切った心で死んでいった息子の姿を見せたいという思いを読み取らなければなりません。

死にたくない、という本音が書かれていなくても、愛する家族にはその気持は判ります。何故なら、多くの遺書には、愛する者に対する限りない思いが綴られているからです。死んでいく者でなければ、あれほど愛の籠もった手紙は書けないと思います。死んでいく者が、乱れる心を抑えに抑え、残された僅かな時間に、家族に向けて書いた文章の本当の心の内を読み取らなければならないと思うのであります。

遺書に書かれた文章をそのまま受け取って、出撃の日に、天皇陛下にこの身を捧げる慶びが書いてあったとしても、それをもって、特攻隊員は心情的には殉死的な自爆テロのテロリストと判断するのはとんでもない間違いであります。

2001年9月11日の所謂9.11事件をはじめ、イスラムの自爆テロは、一般市民を殺戮の対象にしています。無辜の民の命を狙ったものなのであります。ニューヨークの飛行機テロも同じであります。

特攻隊員が狙ったのは、無辜の民が生活するビルではなく、爆撃機や戦闘機を積ん

だ航空母艦でありました。アメリカの航空母艦は、日本の国土を空襲して、一般市民を無差別に爆撃して沢山の命を奪ったのであります。したがって、アメリカの航空母艦は、日本にとっては恐ろしい殺戮兵器でありました。特攻隊員が攻撃したのは、そのような最強の殺戮兵器でありました。

しかも、特攻隊員達は、性能の劣る航空機に重い爆弾を積んで、少ない護衛戦闘機しか付けて貰えずに出撃したのであります。何倍もの敵戦闘機に攻撃され、やっと、それをくぐり抜けた後は凄まじい対空砲火を浴びたのであります。したがって、無防備のツインタワービルに突っ込んだ連中とは断じて同じではない、のであります。

さて、この百田尚樹さんの著書「永遠のゼロ」には、九死に一生を得て生き残った元特攻隊員の話があります。

『特攻隊員の中には、隊員に選ばれて、取り乱すような男は一人も居なかった。勿論、出撃に際して泣きわめくような男も居なかった。彼らの多くは、出撃前には笑顔さえ浮かべる者もいた。これは痩せ我慢などではない。既に心が澄み切っていた』というのであります。

死刑を宣告された犯罪者の多くが、死刑執行当日には、恐怖で泣き叫ぶと聞いたことがあります。自ら立って歩くことも出来ず、刑事達に抱きかかえられるように刑場へ連れて行かれる者もいるそうです。自分の非道な行いの報いでそうなるにも拘わらず、哀れにもそれを受け入れることが出来ないのであります。

したがって、死刑廃止論者の中には、その心理的な恐怖感は、あまりに残酷だとい

う者も居ます。おそらくそうであろうと思います。「お前を殺す」と宣告されて、その日が何時来るか、何時来るかという恐怖の中で生き続けるということは、想像を絶する恐ろしさだと思います。

朝、独房のドアが開いて、刑事が迎えに来たときが死ぬときであります。来なければ一日命が延びるが、それは恐怖が引き延ばされるだけであります。いずれ来るその日まで続く責め苦は、まさに地獄の苦しみであろうと思います。

しかし、特攻要員達は特攻隊員に選ばれた瞬間から同じ状況にあります。朝、空港の指揮所の黒板の搭乗員割に自分の名前がある時が死ぬ時であります。名前がなければ、命が一日延びる。その日は何時くるか判らない。名前が書かれた日、人生は終わる。愛する人にも会えないし、やりたかったことはもう二度と出来ない。未来は数時間で打ち切られる。それがどんなに恐ろしいことだったか、私達が如何に想像しようとしても、それを遙かに超える恐ろしいものであったに違いないのであります。

しかし、彼らは従容としてそれを受け入れたのであります。彼らがそこに至るまでにどれ程の心の葛藤があったのか。それさえ想像できない人間には、特攻隊員の心情を語る資格はないと思います。

勿論、特攻要員達も死ぬ気ではいました。

特攻隊員に指名されれば、潔く散る覚悟は出来ていました。しかし、現実とその境遇に置かれた者と、そうでない者との差は計り知れないほど大きいのであります。

特攻要員や特攻隊員の中には、天皇陛下のために命を捧げたいと思っていた者など一人も居なかった筈であります。

戦後、文化人やインテリの多くが、戦前の日本人の多くが天皇を神様だと信じていたと書きました。馬鹿げた話であります。

そんな人間は誰もいない。軍部の実権を握っていた青年将校達でさえ、そんなことは信じていなかったと思います。

或る生き残りの特攻隊員の話では、

『戦争がおわりに近づいた昭和19年秋のフィリピンのレイテにおける戦いから特攻隊による攻撃が実施されましたが、初めて特攻隊のニュースを聞いた時は、それほど衝撃はなかったと思います。

恐らくその頃は、人間の死に対して鈍感になっていたのでしょう。もうその当時は、新聞でも「玉砕」という文字は珍しくありませんでした。玉砕は「全滅」を意味します。一つの部隊が全員死ぬことですが、日本軍は、全滅という言葉に「玉砕」という美しい言葉に置き換えて、悲惨さを覆い隠そうとしたのです。

当時、日本軍は、そのような言葉の置き換えをあらゆるものにしていました。例えば、都会から田舎に避難することを「疎開」と言い、退却を「転進」と言いました。しかし、「玉砕」は、最も酷い例だと思います。そこには、死を美しいものに喩えようとする意図があります。やがて、新聞紙上に「一億玉砕」という言葉も踊るようになります。

連日、新聞などで多くの死を見てみると、命がドンドン軽いものに思われてきます。

毎日、戦場で何千人という人が亡くなって居る中で、10人ほどの特攻隊が出たところでそれほど衝撃はありませんでした。

然し、いざ自分がその身になってみると、

事態は全く違ったものになります。人間というものはつくづく自分勝手なものだと思います。

私は、父母のことを考えました。私のことを何よりも可愛がってくれた両親のことを。そして10歳違いの妹のことを。

私が死ねば、両親は耐えることは出来ても、妹は泣きじゃくるだろうと思いました。

妹は私のことを誰よりも愛していました。「お兄様が一番好き。お父様よりもお母様よりも、お兄様が好き」というのが妹の口癖でした。

実は、私の妹は、少し知能に障害があったのです。そうした子供の多くがそうであったように、非常に純真で、人を疑うことのない子でした。謂わば神様に近い心を持っていました。それだけに不憫で、いじらしくもあったのです。

父母は耐えてくれるだろう。そして、私の親不孝を許してくれるだろう。祖国を守るために死んでいったことを誇りに思ってくれるだろう。

然し、妹には申し訳ない思いで一杯でした。また、父母が年老いて亡くなった時、妹を助けてやれる人がいなくなる。それが心残りでもありました。

私が特攻隊の志願書を前に、どのように心を決めて決断したのかは、何も覚えていません。心の深いところで、はっきりとした覚悟を持って道を選んだのかどうか、さえ、今となっては思い出せません。

私は、明け方近くになって「志願します」と書きました。全員が志願すると書く筈だという意識が書かせたように思います。私一人が卑怯者になりたくなかったのです。

しかし、後に、何人かは「志願しない」

と書いたらしいと聞きました。私達を意気地なしとみますか。しかし、これは現在の自由な空気に育った人には到底理解出来ないでしょう。いや、現代でも、果たして会社の中で、自分の首をかけて上司や上役に堂々とノーと言える人達がどれほどいるのでしょうか。私達の状況は、それよりも遙かに厳しいものでした。

しかし、今は、「志願しない」と書いた男達は本当に立派だったと思います。自分の生死を自分一人の意思で決めた男こそ、本当の男だったと思います。

しかし、そういう私達自身、決して喜んで死を受け入れたわけではありません。しかし、あの時代は、それ以外に選択の余地はありませんでした。軍部は、特攻を志願しないものを決して許さなかったのです。

あの頃の軍部は、兵隊の命など何とも思っていなかったのです。戦争の末期、特攻で散った若者は4,400人でしたが、沖縄戦での戦艦「大和」の海上特攻では、一度の出撃で同じくらいの人達が命を落としています。

「大和」の出撃は、絶望的なものでした。沖縄の海岸に乗り上げて、陸上砲台として、上陸したアメリカ軍を砲撃するという荒唐無稽な作戦のために出撃させられたのです。航空機の護衛もなく、一隻の戦艦と数隻の駆逐艦が沖縄に辿り着けるなど万が一にもあり得ないことであります。

つまり「大和」もまた特攻だったのです。そして、この特攻は、「大和」の乗組員3,300人とその他の小型艦艇の乗組員を道連れにするものだったのです。

そして、実際に、「大和」の乗組員は、3,000人以上が艦と運命を共にしました。

この作戦を立てた参謀達は、人間の命など屁とも思わなかったのでしょう。

3,300人の乗組員達のそれぞれ一人々に家族が居て、父母や妻、子供や兄弟が居る人間の姿が想像できなかつたのでしょうか。

負けることが判っている戦いに、それでも手をこまねいているわけにもいかず、それなら特攻で意地を見せるといふ軍部のメンツのために戦艦「大和」と数隻の軽巡洋艦、駆逐艦、それに数千人の将兵が使われたのであります。

連合艦隊の誇りともいふべき「大和」でさえ特攻で捨ててしまう、そのような作戦をする軍令部総長や連合艦隊幕僚が、特攻隊の若者の命を使い捨てることに躊躇するはずはありません。うまく行けば、一機の飛行機と、それに乗った一人の人間とで軍艦を一隻沈めることが出来るかも知れません。その一発の命中のために、数十機が無駄になり、数十人の若者の命が無駄になっても仕方がないと思っていたのでしょうか。恐ろしい話であります。

さて当時、海軍が開発した最も非人間的な兵器は人間魚雷の「回天」と人間が操縦するロケット爆弾の「桜花」でした。

「回天」について謂えば、現代の魚雷はコンピューターがついていて、敵艦が逃げても正確にそれを追いかけて命中するように出来ていますが、「回天」は、そのコンピューターの役目を人間にさせたものであります。こんなことは、世界中の何処の国の軍隊も思いつかなかつたことです。

ただ、海軍には、「回天」による「特攻」の下地は、既に開戦劈頭からあつたと謂う

べきであります。これについては時間の関係で割愛します。

また、「桜花」について謂えば、これは飛行機ではなく、爆弾そのものであります。

自分の力で飛び立つことも出来ない、また着陸することも出来ない、旋回することも出来ない、ただまっすぐに滑空することしかできないのであります。陸上攻撃機に吊り下げられ、上空から敵艦に向かって飛んで行くだけのロケットであります。そのロケットに特攻隊員が乗るのであります。よくもまあ、これほど非人間的な兵器が作られたものだと思います。

ここでの訓練は急降下だけでした。高空から落下して目標物にまっすぐにぶつかる、ただそれだけです。そして命はなくなるのです。そのために、零戦を使って急降下訓練をしました。

しかも、「桜花」に乗っての訓練は、たったの一度だけです。「桜花」には着陸用の車輪がないために、機体にソリを着け、高空から凄まじい速度で落下し、地上付近で水平飛行し、滑走路に着陸するのです。

これに成功した者は、「A」とランク付けされ、「桜花」の搭乗員として登録されます。そして、成功した者から次々に九州へ送られたのです。

もし、着地訓練に失敗したら、そこで死にます。多くの者が着地に失敗して命を落としました。水平飛行が出来ず地面に激突する機体、滑走路を大幅に越えて土手に激突する機体、ソリが壊れて滑走路との摩擦で燃え上がる機体、ロケットの噴出装置の故障で墜落する機体。本当に、あの訓練は、恐ろしさを通り越したものでした。

私もやりました。あの恐怖は忘れられま

せん。母機から桜花に移るときには、足がすくみました。陸上攻撃機の床が開き物凄い風圧で飛ばされそうになる中を、吊り下げられてある桜花の操縦席に飛び移るのがあります。勿論、命綱などありません。もし、この時、何らかの手違いか、故障で桜花が落下すれば命はありません。

しかし、この恐怖さえ、落下するときの恐ろしさに比べたら、何ほどのものでもありません。母機から切り離された途端、桜花は、物凄い勢いで300メートル位落下していきます。そのマイナスG（重力加速度の単位）は、強烈で、頭に体中の血がのぼり、破裂しそうな感じになります。そして、口から内蔵が飛び出しそうな感じになります。気を失いそうになるのを必死にこらえ、渾身の力を込めて操縦桿を引き、機体を立て直して飛行場の目標に向かって滑空します。そして、地面ギリギリで更に引き起こし、今度は水平飛行に移ります。これまた想像を絶するほどのGで、目の前が真っ暗になりました。危うく失神するところでした。

桜花が着地したときの衝撃は凄まじいものがありました。身体ごと地面にたたきつけられた感じでした。

私は80年生きていますが、後にも先にも、あれほどの恐ろしい体験をしたことはありません。しかし、実際に、特攻で敵艦に突入した人は、もっと恐ろしい恐怖を味わったに違いありません。

特攻は十死零生の作戦です。アメリカのB17爆撃機の搭乗員達も多くの戦死者を出しましたが、彼らには生きて帰れる可能性がありました。だからこそ勇敢に戦えたのです。必ず死ぬ作戦は作戦ではありません

ん』と。

以上を要するに、将に当時の日本の軍部は、人間の命を奪うことに何の呵責も感じなかったのだと思います。如何に人の命が軽々しく捨てられたか。そういう非人間的な人間の集団が日本の軍部を支配していたのであります。

このような中で、特攻隊として自分の命を捨てていった若者達、その中には、未成年者も沢山居ました。妻子のある若き学徒兵も居ました。彼らが自分の死と直面して、どのように気持を整理して、どのような思いで散って行ったのか、私には想像することも出来ないほど胸の詰まる思いであります。

この話は、私達が絶対に忘れてはならないもの、日本の現代史に深く刻み込まねばならない話であります。

ところで、日本は、太平洋戦争で沢山の戦死者を出しましたが、悲しいことに日本という国は戦死者の死に場所を教えられない国でありました。

日本人はドイツ人に比べて、第2次世界大戦に対する反省が少ない、とはよく言われることであります。真珠湾攻撃などの奇襲によって、日曜日の朝、未だベッドにいた若者を3000人規模で殺したことになるのでありますから、これ一つとっても大変な加害者であることは明らかであります。

また、日中戦争、太平洋戦争における中国の犠牲者は、中国が作成した統計では、軍人の死傷者約330万人、民間人の死傷者が約800万人としています。大変な数の尊い命が失われたわけであります。一昨日の大江浩先生の講義で、YMCAが国際協力をするのは中国に対する贖罪である、

と今井先生が謂われたという話がありました。これは重く受け止めるべき言葉であります。

更に、台湾、朝鮮、南洋諸島など日本の植民地や委任統治領になった地域の人達の苦勞も決して忘れてはならないものであります。1938年に制定された国家総動員法に基づいて1939年に作られた国民徴用令、これは、戦争に当たって必要とされる産業に国家の命令で人員を配置できるとした勅令ですが、この徴用令によって植民地からも日本国内の炭坑、飛行場建設などに沢山の労働者が動員されました。朝鮮を例に取れば、44年までに、朝鮮の人口の16%が朝鮮半島の外へと動員されていた計算になるといいます。

ところが、日本の場合、太平洋戦争が受け身の形、詰まり被害者の形で語られることが多いのであります。それは一体何か。そういう言い方を国民が選択してきたのは、それなりの理由があります。即ち、

44年から敗戦までの僅か1年半の間に90%の戦死者を出し、その90%の戦死者は遠い戦場で亡くなったわけですが、日本という国は、こうして死んでいった兵士の家族に、彼が何時何処で死んだのかを教えることが出来なかった国でありました。

この感覚は、現代に生きる私達からすれば、ほとんど理解し難い慰霊についての考え方であります。

日本古来の慰霊の考え方というのは、若い男性が未婚のまま子孫を残すことなく故郷から離れて異境で人知れず非業の死を遂げると、このような魂は崇る、と考えられていたのであります。詰まり、戦争などで外国で戦死した若者の魂は、死んだ場所、

死んだ時を明らかにして葬ってあげなければならない、このような人の靈魂、慰霊の問題を私達は忘れてはならないと思うのであります。

さて、話の視点を変えましょう。

最近、毎年12月になると、「今年の漢字」というのが発表されます。何年前か、京都の清水寺の管長さんが大きな筆で書いた漢字は、「命」でありました。

当時、マスコミは、今年の漢字がこの「命」という字に決まった理由について、親殺し、子殺しの事件や「いじめ」で自殺した事件のこと等を説明していました。今も相変わらず、親が子を殺す事件、子が親を殺す事件が増えています。このようなことは、昔は殆どなかったと思います。

もっとも、昔も、子が親を殺す事件はあったと思います。これは、「尊属殺人罪」としてもっとも重い極刑であります。「尊属殺」という刑罰があったと言うことは、それに該当する事実、即ち、子が親を殺すという事実があった証拠であります。これは、子は親に孝行しなければならない、親は何よりも大事なものの、親の恩は山よりも高く海よりも深いという儒教の思想によるものだと思われまゝ。もっとも、戦後、この「尊属殺人罪」は憲法第14条の「法の下平等」に反するという理由で廃止されたこととはご承知の通りであります。

然し、親が子を殺す事件は、昔はありませんでした。そのようなことはあり得ないと考えられていました。したがって、もし親が子を殺しても、それは一般殺人罪であって「尊属殺人罪」のような特別の刑罰はなかったのであります。

何年か前、教育基本法という法律が成立しました。この教育基本法の根底に流れる思想は一体何か。更に、教育の根底にあるものは一体何か。と言いますと、それは、「愛」であります。昨日のフォーラムでも「愛」の話が出ていました。

では、愛とは一体何か、と言うと、それに答えることは出来ないであります。何故なら、愛は教育の終着点、詰まり、人間の心の窮極にあるものだからであります。

命ある限り、人間が持っているものは、愛であり、倫理であります。命の大きな働きが心の働きでもあり、それが倫理であり、愛であります。したがって、愛は、人間に根源的なものなのであります。

そして、愛の発現形態が倫理であり、これが文章化されたものが教育基本法という法律であります。

ところで、一般に、愛は、他者への愛が考えられて居ますが、私は、愛は本質的には「自己愛」であると思います。既に皆さんご存じの物語だと思いますが、昔、インドに相思相愛の王様が居ました。ある時、王様が最愛の奥様に、「よく考えてみると、私は、最愛のお前より、私自身の方が一番愛しいように思う」と言いました。すると奥様も、「実は、私も、貴方より私自身の方が一番愛しいと思います」と言いました。

そこで、王様は、「皆が自分自身が一番可愛いと思ったら、この世の中は成り立たないね。お釈迦様に聞いてみよう」と言って、お二人はお釈迦様のところへ行きました。お釈迦様はお二人の話をお聞きになって、「人間は誰でも皆自分自身が一番可愛いのです。それでよいのです。ただ、自分自身が一番可愛いように、相手も自分自身

が一番可愛いと思っていることを忘れないように」とお諭しになりました。

ここから、相手に対する思いやりの心が芽生えるのであります。自分以外の人に対する愛が始まるのであります。そして、世の中の人達が皆このような心を持って初めてこの世の中がうまく成り立つのであります。

即ち、自分自身を愛することが出来て、初めて人を愛することが出来るのであり、世の中のことを考えることが出来るのであります。このようにして、初めて「人は育つ」のであろうかと思えます。自分自身を愛することが出来ない人は、他人を愛することも出来ません。そして、人から愛されたことのない人は、人を愛することも出来ないのであります。

最近、時として自分の子を殺す母親が居ます。この母親は、可哀想に、恐らく生まれ落ちてからこのかた一度も自分の親から愛されたことがなかったのだと思います。

したがって、自分の子を愛することも出来なかったのであります。

また、子供が親を殺す事件も増えています。親から愛されない子は、人を愛することが出来ません。したがって、少年犯罪が激増しているのであります。子供は、少なくとも幼児期は、抱きしめるようにして愛してやるべきであります。そうでなければ「人は育たない」と思います。

このように致しまして、結論を申し上げますと、愛は「自己愛」が出发点であると思います。自分を愛することができないために戦時中の「特攻」などという非人間的なことを考え出すのであります。

歌人吉野秀雄に、死の床にある妻とその

子を詠んだ歌があります。

「をさな子の服のほころびを汝は縫へり
幾日か後に死ぬとふものを」
「をさな児の兄は弟を励まして
臨終の母の脛さすりつつ」

親は子に心を残しつつ死んで逝く。子はつらくとも親の死を受け入れる。私は吉野秀雄の歌を思い出しながら、親と子はせめてそうであって欲しいと思うのであります。

昨年でありましたか、この歌を思い起こす事件が一週間の間に二つありました。

一つは、一歳の子を虐待で死なせたという両親についての裁判員裁判であります。大阪地裁の判決は、求刑の懲役10年を遙かに超える懲役15年でありました。マスコミは、判決の量刑は求刑の8掛けが相場だと久しく謂われてきたが、その物言いにはどこか裁判官と検察官、弁護士のなら合いの臭いがしたと謂いますが、そうではありません。これは、元来、刑事訴訟の形態が制度として、原告である検察官の刑罰の請求に対して裁判所がこれに答えるという形を採っているため、請求の範囲内で量刑がなされるに過ぎないのでありまして、現に請求通りの判決も沢山あります。更に原理的には請求を上回っても何ら差し支えないのであります。この判決は、請求の1.5倍であります。恐らく、親よりほかに頼るものがないのが子であり、親に縋り付かなければ生きていけないのが子であります。その子に対する親の責任を重くみたのであろうと思います。裁判員の心情がよく伝わって来る判決でありました。

もう一つは、無理心中を図ったと見られ

る鹿児島母親が10歳から4歳までの3人の子を殺した容疑で逮捕された事件であります。無理心中の事情は判りません。どうすれば防げたのかということも解りませんが、ただ、子の命は親だけのものではない、とは言い切れるのであります。

吉野秀雄の歌をもう一度反芻して下さい。親は子に心を残しつつ死んで逝く。子はつらくとも親の死を受け入れる。親と子はせめてそうであって欲しいと思うのであります。

さて、ここで、「命」ということについて、少し頭の整理をしておきたいのであります。というのは、私達は、今、豊かになって、自由で、便利になり、世界中で最も恵まれた生活をしています。したがって、生きていることが当たり前だと思っています。否、日常の生活では、生きていることの意識さえありません。

しかし、今、ここに居るこの瞬間にも、如何に生きるか、を必死に考えている人達もいます。そして、生きたいと思いつつも、食べるものがなくて、飢えて死んでいく人達もいます。このようにして、世界中で、1年間に8000万人の人達が飢えて死んでいるのであります。この事実をどのように受け止めるべきでしょうか。

この人達も、神様から与えられた命を一生懸命に生きてきた人達であります。そして、野良犬や野良猫も同じく、神様から与えられた命を一生懸命に生きています。モルモットや実験動物も同じであります。彼らも、命ある限り生きたい、という本能を持っています。

ところで、科学技術の発達によって医学

は大変に進歩しました。人間の幸せのためには大変有り難いことではあります。しかし、医学の進歩の陰に、何千万、何億というモルモットや実験動物の命が犠牲にされています。このことに思いを馳せる人は、非常に少ないのであります。このことを一体どう考えるのか。

人間の幸せのためであれば、モルモットや実験動物の命を奪ってもよいと考えるのか。しかし、彼らも神様から命を与えられて生きているのであります。その命を奪うことは罪ではないのか。もし、罪だとすれば、その罪は、一体、誰が、何時、何処でどのようにして償うのか。

元来、私達人間は、動物の命、植物の命、生きとし生けるもの全ての命を頂いて生きています。この生きとし生けるものの命を奪って生きていく人間とは一体何か。そもそも生きとし生けるものの命とは一体何か。このようなことを問いかける教育が今の日本の教育体系に欠落しているのであります。

牛や豚や鶏その他家畜と呼ばれる動物を殺して食べている人間とは何か。野犬狩りをして野良犬の命を奪うことは当然のことなのか。他に方法はないのか。

色々を問題があります。これらは全て私達が謙虚に考えなければならない問題であります。動物の命を奪うことについては、日本には、古来、供養という考え方があります。猪供養、鮎供養などがあります。猪や鹿を獲ることによって、即ち、その命を頂いて生活している山の猟師は、猪供養をして猪達の霊を弔っています。また、川や海の漁師は、鮎供養、鯛供養などをしていきます。これは、自然に対して謙虚であるこ

との一つの証しでもあろうかと思うのであります。因みに、ヨーロッパ西欧社会には、このような供養の思想は、無いようであります。

要するに、人間は、自分が生きるために動物の命を奪っています。そのことを当然のこととしています。要するに、科学技術の発達は、結局人間中心の考え方に基づいているのであります。

では、肉食主義者が肉を食べないのは、これに対する反発なのか。それとも宗教的な考えなのか、それとも栄養学的なことを考えて肉を食べないのか。それならばやはり人間中心の考え方であります。肉食主義者も植物の命を奪っています。このことをどのように考えるのか。

また、人間は、極限状況になったとき、生きるためには、道徳や倫理も失うこともあるのではないか。戦時中、ラバウルでは、人肉も食べたと謂います。人間の命を考えると、これは難しい問題であります。色々な問題を含んでいます。

何はともあれ、これは大きな問題であります。簡単に解決できる問題ではありませんので、問題点を指摘するに留めておきます。

さて、元来、私達の命は、地球に生命が誕生した無限の彼方から連綿として続いて来たものなのであります。母親が死んでから生まれた人はいません。母親の胎内で父親の精子と母親の卵子がくっついて新しい命が宿ります。その母親の命は、祖母の体内で祖父の精子と祖母の卵子がくっついて新しい命が宿ります。このようにして遡って行きますと、人間の前は猿だったとか、爬虫類だった、魚だった、という祖先まで

遡って行くならば、地球に生命が誕生した無限の彼方まで遡ることが出来ます。即ち、私達の命というものは、人間になってからでも10億年、15億年という歳月を経て、無限の彼方から続いて来たものであり、その意味では、大変に年季の入ったものなのであります。

したがって、母親のお腹から出てきた時に、急に自分の命が出来たなどと馬鹿なことを考える人は別にして、自分の命は、ずうっと先祖代々、その先祖も人間という先祖だけではなく、もっともって昔から、地球が生まれる前から続いてきた命が、ドンドン進化してきて、そして今日、私という身体になり、皆さん達という身体になっているということに気付けば、この肉体が持っている年季の入った知恵というものが如何に凄いものかということが判る筈であります。

曾て昭和の終わりに、NHKで、人間の身体を小宇宙に例えて、驚異的な素晴らしい映像が放映されたことがあります。

私達の命というものは、今生きているこの命というものは、未だ嘗て、途中で断ち切れたことのない命なのであります。したがって、その命が生まれ代わり、死に代わり、次々と子孫に受け継がれてくる間に、どれ程の経験とどれ程の試練を乗り越えながら、どれ程深い知恵を体得して生きているか判らないのであります。したがって、命というものは大事にしなければならないのであります。にも拘わらず、最近は簡単に人を殺します。また、簡単に自殺します。

平和を標榜する理想的な民主国家であるべき日本の倫理・道徳そして教育は一体どうなったのかと思うのであります。

平和と命に関わる根本命題、人は如何に

生きるべきかという倫理教育の必要を痛切に感ずるのであります。

さて、頭休めに少し横道に入るかも知れませんが、人は死ぬと、その後はどうなるのでしょうか。

風が吹く仏来給ふけはいあり 高浜虚子

これは、正岡子規の弟子であり、日本俳句会の大御所であった高浜虚子の句であります。これは、どのような状況で詠んだ俳句かと申しますと、葬式や法事などの際に不意に風が吹いてきて、まるで亡くなった人が訪れて来たような気がすることがあります。勿論、それは風だけに限るものではありません。雨の場合もあります。例えば、お父さんの一周忌の墓参りの際に、急に虹が架かると「あっ、お父さんが喜んでいる」と言った人もいます。しかし、蠟燭の灯が揺れたり、如何にも亡くなった人がやってきたと感じるのは風が吹く場合であることに異論はないようであります。

さて、この虚子の俳句などを見ると、靈魂というものがあるのか、ないのかの議論になりがちではあります。

ただ、本来の仏教が靈魂の実在を説くとは考えられませんが、靈魂というものがあるのか無いのかの議論はひとまず置くとしましょう。私はそのような難しいことは解りません。しかし、この句のような「霊との交流」はあるのではないかとも思われるのであります。

先ず、東京浅草の浅草寺貫首清水谷幸尚和尚の話を紹介します。それは和尚の子供の時の体験だそうであります。和尚は、信州の山寺で育ったのであります。

『庫裡で夕食を食べている時、誰もいな

い筈の少し離れた本堂の障子戸が開く音がします。すると、老師が「ああお檀家に人が亡くなられた」と言いました。すると暫くして2人の人が夜道を提灯を頼りに「今晚は。誰々さんが亡くなりましたのでお葬式をお願いします」と言って来られました。

ぞっとしましたが、目に見えない世界のことを知らされた』と述懐しておられます。

また、清水谷和尚は、昭和51年に南太平洋の昔の日本海軍根拠地でありましたトラック島へ戦友の遺骨収集に厚生省から派遣されました。そこは、和尚が曾て従軍していたところでありましたが、32～3歳の青年のご遺族がご一緒でした。

毎日、遺骨の発掘に務めました。一日の作業を終えて宿舎に戻った夜、遺族の一人が夢を見ました。『今日掘ったところから東へ200メートルのところを掘って下さい』という夢を見たのであります。そして、その言葉通り、その場所から一柱の御遺骨をお迎えすることが出来たというのであります。

このようなことから、和尚は、霊界からの呼びかけは慥かにある、と信ずるようになったというのであります。

話は変わりますが、徳川夢声さんは、「私は霊魂があるという側で、霊魂はないという側の人とよく議論するのですが、根本に突き当たると、向こうは、あるということ証明してくれと言う。しかし、それは出来ない。世の中は、みんな証明されたことばかりをもって生きているかということ、決してそうではないので、我々は証明されないことを色々と生きて行く上よりどころとして現在の生活を営んでいる。

例えば、噂をすれば影がさすという。家

の者が急に或る人の噂をし始めると、それから殆どものの3秒も経たないうちに、こんにちとは、その人がやって来る。…もし、ここに霊というものがあり、霊の一種の波動が互いに感応するものとして説明すると、簡単に説明がつくわけです」と言っています。

この話は、靈魂の話とは関係のないことかも知れません。或いは関係があるのかも知れません。ただ、私には、関係があるようにも思えるのであります。

さて、話が少し暗くなりましたので、ここで話の視点を180度転換します。そこで、平和で、豊かで、自由であることが、返って私達の命の働きを弱める、という話へ入っていきます。

私は、若い頃に「スエーデンの王様が、現代社会は色々な知識に満ちているが智慧がないと言った」という記事を読みました。はてこの言葉は一体どういう意味かな、と疑問に思ったために、その後、私の記憶に残っていました。

この「現代社会は色々な知識に満ちているが智慧がない」という言葉は、なかなか含蓄のある言葉でありまして、私達が、人間の生き方というものを考えるときに肝に銘ずべき言葉であろうかと思えます。何故かということ、単に知識を沢山持っているということは、人間にとっても、社会にとっても何らの意味を持ちません。むしろ、ある場合には有害無益でさえあります。それは何故かと言いますと、確かに、現代社会は色々な知識に満ちています。それは科学技術の高度に発達した社会であります。しかし、問題は、その科学技術を使う人間の心にあります。

科学技術は、謂わば知識の結晶であります。したがって、色々な知識によって科学技術は、進歩します。原爆も作り出せば、原子力発電所も作り出します。

しかし、科学技術それ自体には「倫理」というものはありません。したがって、科学技術を使う人間に智慧がなければ、科学技術は、暴走することになります。したがって、科学技術には、この暴走を食い止める何らかの歯止めが必要となります。その歯止めが人間の「倫理」であり、「智慧」であると思うのであります。

そして、色々な知識を主体的に駆使し得る人間の健全な心、それが智慧と謂うべきものかと思うのであります。それが具体的には何か、ということについては後で申し上げます。そして、このような「智慧」は、先天的なものだけではなく、後天的に私達の努力によっても生まれてくるものではないかと思うのであります。

実は、1912年にノーベル医学賞を受賞したフランスの生物学者アレクシス・カレルが【人間、この未知なるもの】という本を書いています。

これは私の愛読書の一つであります、アレクシス・カレルはこの中で

『今日の機械文明は神が創ったものではなく、人間が開発したものであることをもう一度確認しよう。その機械文明をここまで開発した張本人の人間とは一体何か。迂闊にも科学者が人間そのものについての探索を怠ったところに、今日のバランスの乱れた文明が出来上がったのではないか』と言って科学技術文明を痛烈に批判しています。神は完全なるものだが人間は不完全なものであるが故に過ちを犯すということを

忘れてはなりません。

将に、その原爆を作ったのも、原子力発電所を作ったのも人間でありました。神様が作ったわけではないのであります。したがって、科学技術文明というものは、人間の飽くなき欲望によってドンドン開発されて行きます。そうだとすれば人間が科学技術文明に振り回されないで、これをうまくコントロールするだけの人間の精神の充実、即ち人間の「智慧」がなければならないと思うのであります。

ところが、今の日本にこの智慧があるのでしょうか。現在の科学技術文明の目標とか価値とかは一体何かと謂いますと、それは豊かさであり、便利さであります。実は、これが人間の精神の充実、即ち、人間の「智慧」を妨げるのであります。

したがって、『物の豊かさは人間の精神・心を貧しくする』と謂う考え方に繋がって行くだろうと思うのであります。

このことは、今の日本の現状を見れば痛感されるところであります。例えば、科学技術を適正にコントロールする智慧がなかったがために、当然のことながら東日本大震災による原発被害をもたらしました。

神様が作ったものではない人間が作り出した原子力発電所によって今甚大な被害が発生しています。

私達は、この大震災を契機として、今一度人間の「智慧」というものについて考え直すべきではないかと思うのであります。

そこで、今から約30年程前に、国際キリスト教大学の石川光男先生の本を読んで教えられたことを少し紹介しておきたいと思えます。

まず、私達人間が元来どのようなにした生

きてきたのか、というところから考えてみますと、人間は元来、大昔の原始時代から自然の脅威、暑さ寒さに耐え、地震その他の天変地異に耐えながら、それに従うという謙虚な生活をしてきました。

しかし、やがて、人間は、生きていくために狩の弓矢とか農業の鋤・鎌等色々な道具を作り出し、その道具を使って、狩猟民族と農耕民族に分化していきました。

そして、まず、狩猟民族は、自然との関係では絶対者としての神を崇めます。そして、自然に対してはこれを支配するというものの見方が生まれてきたと考えられるのであります。これは、神と人間と自然の分離という自然観であります。

これが従来ヨーロッパ西欧社会における近代科学のものの見方でありまして、謂わば、力としての知識という考え方に立っているのであります。

これに対して、農耕民族は、インド、中国及び日本では農耕を主としていましたから、昔から、ひたすら自然に学ぶという知的態度がありました。これは換言すると、自然に従うという謙虚な態度をも意味するのでありまして、これが短歌や俳句などの短詩型文学を生む素地でもありました。これは、自然を支配するという西欧社会の近代文明のものの見方とは極めて対照的であります。

そこで、このような近代文明の源流を探って行きますと、イスラエルに育ったユダヤ教やキリスト教の自然観に行き当たります。即ち、

紀元前8世紀から4世紀までの間に、ギリシャ、インド、中国、イスラエルの間で大きな精神的革命があり、普遍的原理を求

める思想が相次いで生まれましたが、丁度、この時代にイスラエルで旧約予言者が現れているのであります。

このユダヤ教からキリスト教に繋がる自然観の中では、天に神があり、地に人と自然があり、人が自然を支配する、詰まり、神と人と自然とが分離するという自然観が現れていまして、このような自然観は、17世紀の近代科学のものの見方に繋がっていることに気づくのであります。

このような謂わば一神教に特有なものの見方は、自然に従うというものの見方を特徴とする多神教的な文明とは大きく対立するものでありまして、このような文明を現代社会でどのように考えて行くか、どのように調和させるかは、大きな問題なのであります。

そこで、この視点から現代社会を見てみますと、私達の身の回りには、色々な技術があります。それらの技術には、人間が自然を支配するという力づくの技術がかなり多く見られるようになりました。例えば、

近代農法では、殺虫剤や除草剤或いは化学肥料を使って農作物を育てますが、有機農法の農場では、除草剤も殺虫剤も全く使わず、堆肥だけで作物を育てます。ところが、そのような作物は、近代農法で育てた作物よりも遙かに生命力が強いという実験があります。

例えば、野菜の日持ちが近代農法の作物と有機農法の作物とでは全く違っていて、近代農法の作物の方が遙かに早く腐っていくという事実があります。米にしても、水の中に漬けておくと、近代農法の米は、かなり早い時期に腐って、水がどす黒くなっ

ていきますが、有機農法の米は、水も全く汚れず、何年間も腐らずに水の中でそのままの姿を保っていると言います。

このような違いを見るにつけても、現代科学による力づくの技術と人間の命を生かす技術には大きな違いがあることが解ります。

ここで命という言葉の意味は、自然界の持っている秩序とか摂理という意味であります。この自然の秩序・摂理を生かす技術を仮に「命を生かす技術」と呼んでおきます。このことについては色々な実例がありますが、今日は時間の関係で割愛します。

以上を要約しますと、平和と命というテーマで如何に平和を守ることが大切なことか、例えば、中国の胡適の論を見ても解りますように、リーダー達が一生懸命に色々なことを考えて、沢山の犠牲を出しても窮極の平和を守るためには大変な覚悟が要るということを言った人が居るということを心に留めておいて頂きたいのであります。

それから、命というものについての考え方も、今申し上げましたように、命と謂っても、生命と命とは同じなのかという問題もあります。また、命というものは、地球の始まるその遙か彼方から脈々として現在に続いて来ているという命、それと同時に、一つの個体としての人間が死んだり生きたりするという事なども全て考え併せて、平和と命という問題を考えなければならないと思うのであります。したがって、この話の冒頭に申し上げましたように、世界的な視野に立って、空間的には広い視野で、そして時間的には永い視野で、即ち、地球の始まりから過去、現在、未来へと亘って

いく物指しで物事を判断していくことが大切であります。一つのことだけに拘ってはならないのであります。したがって、昨日のフォーラムでも申し上げましたように、例えば、弁護士は法律の勉強だけしては駄目でありまして、あらゆることを勉強しなければならない、したがって、例えば、皆さんが自分の職業の専門分野だけを勉強するのではなく、沢山の人に出会い、沢山の話を聞いて自分の心の糧にしていく、そのようにして育ったリーダー達が沢山増えていけば、自然に良い社会が生まれて来るのであります。

問題は、一人ひとりの人間が大事だと謂うことでもあります。このように致しまして、今、世界中にロータリアンが100万人以上居ますが、その一人ひとりのロータリアンの心が大事である、ということこそロータリーは説くのであります。したがって、ロータリーとは何か、世のため人のために働いているロータリーとは一体何か。それは、ロータリアン一人ひとりの心の中にある、ということこそ Edd.Mclaughlin というロータリーの指導者が説いています。

彼は、1960年、全世界のロータリアンに対して、"You are Rotary"「貴方がロータリーですよ」というターゲットを打ち上げました。ロータリーというのは国際ロータリーの事ではない、ロータリークラブの事でもない、あなた方ロータリアン一人ひとりの心の中にあるもの、それがロータリーなのです、と全世界のロータリアンに呼びかけたのであります。

同じことを私は皆さん方に申し上げたい。RYLAとは何ですか。今日ここに居られる皆さん方一人ひとりの心の中にある

もの、それがRYLAであります。リーダーを育てる、そして、自らもリーダーになって世のため人のために働いていく、そのような心を育てるところ、それがこのRYLAなのであります。

そこで最後に "You are RYLA"、ということをお願いして私の話を終わりたいと思います。御静聴有り難うございました。

..... あ と が き

2001年に、竹中秀夫会員の発案により始まった深川純一会員の「純ちゃんのコーナー」も、今年度で12年になりました。深川会員のロータリーの真髓を直接聞かせていただけるのは、伊丹クラブメンバーとしての喜びであります。

このたび、12冊目の冊子が完成いたしました。

昨今、正しい歴史認識が必要であると叫ばれる中、本号では、ロータリーの原点、精神、歴史やリーダーシップについてわかりやすく解説されております。そして、RYLAの講義では「平和と歴史」について考えさせられる内容となっております。ぜひ頁をめくっていただければ幸いです。

最後になりましたが、発刊に献身的なご尽力をいただきました深川純一会員、武内重治会長、白井良夫幹事をはじめとする会員の皆様そして事務局の吉永恵子さんに深く感謝いたします。

2013年9月 雑誌・ロータリー情報委員会

